

全体的に強化してみたハイスクールD×D 赤龍帝とブラコン弟

空騒

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

赤龍帝兵藤一誠には弟がいる。

赤龍帝の力により呼び込まれた彼の出現により広がる波紋は、本来在るべき姿を歪め狂わせる。

バタフライエフェクトによりガンガン上がるトラブルの難易度。変化した世界により強さを高めた彼等によって、物語は別の側面を顕わにする。

ブラコンの弟と、強くなった赤龍帝がやっぱりエロさで暴れる物語。

## 目次

### 第一章 兵藤一家のトラブルメーカー

l i f a .	1	兵藤家のエロ兄弟	1
l i f a .	2	怪しい彼女とストーキングミッション	7
l i f a .	3	デート終わりのディアボロス	14
l i f a .	4	赤い夢と部活訪問	30
l i f a .	5	オカルト研究部とレア兄弟	39
l i f a .	6	真夜中の模擬戦	48
l i f a .	7	白髪のエクソシスト	58
l i f a .	8	聖書の子と悪い予感	69
l i f e .	9	王様のお仕事	77
l i f a .	10	夜の騒乱	89

# 第一章 兵藤一家のトラブルメーカー

## lif a. 1 兵藤家のエロ兄弟

夕暮れの公園に響き渡る少年の慟哭。あまりに悲痛で、憎悪にまみれた叫び。

胎動していた物語は動きだし、形を変えて誕生する。



「……はあっ……はあっ！」

春の肌寒さを感じることが少なくなり、夏の気配が強くなり始める頃。日も沈みだした夕暮れの街道を、ツンツン頭の少年が笑顔で疾走していた。

少年の名は兵藤一誠。学友からは『イツセー』と呼ばれている性欲の権化だ。

「……くくくっ……ふははっ……あーはっはっは!!」

運動部を凌駕しかねない速さで疾走しながら三段階の高笑いすらする余裕を見せる一誠。端から見たら完全に不審者なことなど毛先程も考えずに家へと走る。

その表情は歓喜に彩られている。それも当然だ。何故なら、この日一誠は天野夕麻と名乗る美少女に告白され、晴れて彼氏彼女の関係となつたのだ。

あまりの歓喜に打ち震えている所を友人達に見つかり、締め上げられている内に放課後になってから中々の時間が経ってしまった。この嬉しさをいち早く弟に伝えるべく、一誠は走っていた。

見慣れた自宅を視認した途端、更に速度を速めた。流石に息切れをしながら玄関に入り、脱ぎ捨てるように靴を脱ぐと同時に叫ぶ。

「ただいまっ！ー 一実iiiiiiiiっ！」

「おかえりー」という母の声に返事を返しながら、弟の名前を叫んで

階段を駆け上る一誠。

笑顔で自室の隣にある弟の部屋に繋がる扉を開いた。

「居ないっ！」

出鼻を挫かれたと思う一誠の耳に、「こっちだぞー」という声が隣の自室から届いた。なんだそっちか、と呟きながら自室の扉を開いた。「どした兄貴。いつもより遅い帰宅だな」

扉の先には、一誠のベッドに座り、ビニール袋から何かの箱を取り出している弟の兵藤一実がいた。口元に笑みを作っており、兄ほどではないが嬉しそうな表情を作っている。

「一実っ！ 聞いてくれよ、俺、彼女出来た！ おっぱいのおつきい彼女出来た！」

「おう。兄貴、そんなことよりも新しく目覚まし買ったけどどうする」

一誠の言葉を妄言と断じているのか、一実は一誠の発言に軽く相槌を打つと手に持った箱を一誠に見せた。箱には『萌え萌え目覚まし時計』と可愛らしくデザインされていた。

「嘘じゃないんだよ！ 本当だっ」

欠片も信じていない一実の様子に、一誠はポケットから取り出した携帯電話から、彼女から貰ったメールアドレスと、一緒に撮った写真を表示すると、一実に詰め寄って見せ付けた。凄まじいドヤ顔で。

証拠を提示された一実は、手に持っていた『萌え萌え目覚まし時計』の箱をベッドに落としてショックを受けていた。

そして、一回、二回と瞬きをすると一誠に声を掛けた。

「……………これ、マジ？」

「マジもマジ。大マジだぜ。ビビっただろ？」

「しかも超美人……………だと」

写真の中で一誠の隣で微笑む少女。一誠は彼女を天野夕麻と紹介した。黒髪でスレンダーな体型をした完璧な非の打ち所ね無い美少女。一実は、夕麻の姿を見て軽い違和感を覚えたが、それもすぐに霧散した。

一実はその場ですくりと立ち上がると、特徴的なアホ毛を揺らしながら手を振り上げた。

バチンツ、と音を立てて二人の手が組まれる。

「やったなっ！ 兄貴！」

「おうっ！ 遂に、遂に彼女が出来たぞ一実！」

肩を組み、喜びを分かち合う二人。その場でぐるぐると肩を組みながら回転する。しばらくじやれ合うと二人はベットに腰掛けて話し合った。主題は一誠の彼女の事。

どちらから告白したのか、いつ会ったのか、何処まで やったのか、少しおっぱいがデカ過ぎる。一実の質問に一誠は笑顔で答え、最後の質問で乱闘に発展しそうになったが、彼女持ちの風格を纏う一誠が余裕を持って対処した。

そして話題は時計の話に移った。

「ところで一実。この時計どうしたんだ？」

「ああ、兄貴が前に使ってた時計あったろ。アレを調べてみたらパチモンだつて事が分かったんだ」

「はあっ?! あれ高かったのにパチモンなのか?!」

一誠の叫びは最もだ。一誠が愛用している『萌え萌え目覚し時計』は人気商品であり、手に入れるのに苦労したのだ。それをパチモン等と言われたらショックを受けてしまう。一実は箱から時計を取り出すと、枕元に置かれた一誠の時計と比べるように並べた。

「な、見た目だけでもこんだけ違うんだ」

「確かに……こつちの方がデザインに凝ってるな……細部の色使いも丁寧だ」

並べられた二つの時計。一実が買ってきた時計を見ながら一誠が呟く。一見違いは無いように見えるが、二人の目には全くの別物として写っていた。

鮮やかなピンクを主体とした本体。文字盤に描き込まれた、細部まで技工を凝らしたイラスト。時計の短針と長針の先端は小悪魔の尻尾の様な造りをしている。音声が出るスピーカー部分も、全体の雰囲気壊さないように隠され、しかし音声を遮らないようにされている。

時計一つに注ぎこまれる熱意は、思わず息を呑むほどに強烈だっ

た。

「……一実、幾らしたんだコレ」

恐る恐ると値段を尋ねる一誠。細部へのこだわりを感じるデザインと、パチモンでは真似できない萌えへの熱意。そして、箱の商品説明欄に記載された台詞、それはパチモンとは違い、萌え属性への理解が感じられた。しかもパターンが個別で数十種類存在している。

そんな一品が、安いはずがない。一誠の質問に対して、一実は森羅万象を悟った聖人の如き表情……果てしなくウザいドヤ顔で宣言した。

「税込二万七千円だ」

「っ！」

それは、パチモンの実に約二倍の値段であった。この手の時計にしては中々高額だが、一誠の驚愕はそこではなかった。

「そんな、そんなに安いのかっ……！ このクオリティでっ！」

「ああ、しかもだ兄貴。コレを見ろ」

一実が箱に付属していた袋を破り、一誠に見せる。小さめのカードに見えるそれには『えっちな声で起きたい貴方のための妹ボイス』と、大文字で記載されていた。

時計内部に挿入することで、ボイスを変更できる。しかも破られた袋には別バージョンの存在さえ書かれていた。圧倒的なまでのこだわりを感じずにはられない。

「俺は、俺はこんなにも素晴らしい物の存在を知らなかったのかああああああ！」

パチモンなど、足下にも、いや、同じ土台にすら届いていなかった。

自分の無知に嘆く一誠に、一実は笑顔で言った。

「兄貴、これは兄貴のだ。オレのはもう部屋にある」

「か、一実いいいい。お前は本当に自慢の弟だああああ」

笑顔の一実が、一誠には天使にすら見えた。

だが、一誠は少し引っ掛かるところがあった。一実は基本的にお小遣いを無駄に浪費する性格ではない。一誠に何かお土産を買ってくる事は良くあるが、今回のように高額な買い物は初めてだ。それに、

いつもより機嫌が良いことに今更ながら一誠は気が付いた。

「なあ一実、お前なんか良いこと有ったろ」

「お、流石兄貴。分かっちゃやうか？」

「流石にな」

一誠のあまり良くない頭でも、一実の様子から考えれば自然と答えは出てくる。しかも一実がつい上機嫌に浪費してしまう程に喜ばしいことに、一誠も少し気になってくる。

「何があっただ？」

「ふふふ、実はな、小猫ちゃんが漸くオレと一緒に弁当を食べてるときに喋ってくれたんだよ！ 凄くね？ めっちゃ凄くね？」

心底嬉しそうに話す一実。それもその筈。一実が入学して一日目から一目惚れした、学校のマスコットの存在である塔城小猫に対して行っていたアピールがやっと実を結んだのだ。

積極的に話し掛け、何とか話題になるキーワードを見つけ出し、お菓子作りにすら手を出した。誰の目から見てもゾッコンであり、それは兄の一誠もよく知っていた。

それ以前に一実の学校の話は九割小猫に関する事であり、もはや耳にタコが出来るレベルであった。いつも一緒につるんでいる友人の一人にロリコンがいるため、小猫の幻影で見えそうになるほどだ。

そんな事はさておき、一実の進展に一誠は素直に喜んだ。

「やったじゃねえか！ 食事中は無視られるっていつも言ってたもんな」

「うん。やっと、少し気まずい空気で弁当を食べる必要がなくなるぜ」  
茶色のアホ毛を尻尾のようにブンブンと振って喜びを表す姿は犬のように思えて、見ていると一誠も何だか嬉しくなってくる。

「このまま順調に行けば……むふっ」と怪しさ満点で呟いていた一実が、ブンブンと激しく振っていたアホ毛を突然ピンツと立ち上からせ、思い付いたとばかりに一誠に言った。

「なあ、兄貴。夕麻さんとデートに行く予定は勿論あるよな？」

「ん？ ああ、行けるなら行きたいな。初めての彼女だし、大事にしないな」



「じゃあ、一緒に考えようぜ！ オレもいつか小猫ちゃんと一緒に行くときの参考にしたいし」

楽しそうに笑顔で話す一実。妄想で小猫とのデートまで言ったのかと呆れを覚えるが、一誠としても有り難い申し出に了承の意を伝えた。

二人はその後、母に夕飯だと呼ばれるまで話し合い、食後もデートの計画で会話に花を咲かせた。

「ラブホは確定だよな」

「いや待て一実。俺は洋服店とかの方が良いと思うぜ」

「じゃあ、小物とかは？ 後、スイーツバイキング的な場所もいったりしたら退屈しなさそうだな」

「お、良いな。んじゃー」

二人の『デート成功作戦』会議は両親に怒られるまで続いた。

一実は、夕麻の写真を見て覚えた違和感など、この時には完全に忘れてしまっていた。

「てかさ、一実……」

「どした改めて」

「俺さ、彼女とか初めてだからどんな態度で接したらいいか分かんねえ」

「オレに聞くな喧嘩売ってんのか。兄貴は兄貴らしく、兄貴っぽさを演出すれば大成功だろ」

投げやり気味に言ったこの言葉が、本当に効果があるとは、一実のブラコンセンサーをもってしても予想外であった。

## lif a. 2 怪しい彼女とストーキングミツシヨ ン

兵藤一実には兄がいる。

エロ猿で、性欲の権化で、犯罪一步手前のスケベ行動に青春を費やす。

一実が通う駒王学園では、女子生徒の比率が高い。数年前まで女子校であったからそれも仕方のないことだ。

故に、そんな環境でスケベ行動をした場合どうなってしまうかは火を見るより明らかだ。一誠は蛇蝎の如く嫌われており、評判はあまり良くない。だがそれも最早名物扱いになっている側面もある。一誠が陰気な性格であつたなら、イジメやら嫌がらせやらを受けた可能性もあるが、彼の明るい性格によりそんな問題はなかった。

兄弟に有名人である一誠を持つため、一実も入学当初は話題になった。勿論、「変態が増える」というマイナスな方向でだが。

一実に不名誉な噂が飛び火した事で、一誠と愉快な二人が謝罪をした事件は駒王学園では一種の伝説となっている。当の一実は一目惚れした小猫の追っかけに全力を注いでいた為にそんな事は毛程も気にしていなかったという事は、兄弟の間ではもう笑い話だ。

一実は、そんな兄が大好きだ。いつも笑い合って、背中を押してくれる兄が。いつも辛い時に手を伸ばしてくれる兄が。

泣いていると必ず助けてくれる兄を、一実は心の底から敬愛している。



「こんにちは、一実くん」

一誠に彼女が出来た数日後の休日。両親が仲良く出掛けた、昼を少し過ぎた頃の兵藤家に彼女は現れた。

「ああ、どうも初めまして。兵藤一実です。兄がいつもお世話になってます」

「貴方のお話はいつもイツセーくんから聞いてるわ。とってもいい子

だつて」

「そんな事はありませんよ。うちでも夕麻さんの自慢を良くしています」

「ふふ、愛されてる実感が持てて幸せだわ。イツセーくんを好きになれて良かった」

柔らかい物腰で会話をする一実と夕麻。その横で一誠は恥ずかしげに頬を掻いている。

「あつ、お茶も出していませんでしたね。すみません、今用意しますから、兄と一緒に座っていて下さいね」

「ええ、分かったわ。わざわざありがとうね」

「か、一実、お茶ぐらいなら俺が」

「兄の彼女と二人きりとか気不味くて泣くわ。いいから座つてなつて」

お茶を用意するために立ち上がる一実に、自分が変わろうと声を掛ける一誠。その言葉をばつさり切るときささと台所へと向う一実。

台所の戸棚から茶葉を取り出し、急須に入れる一実の後ろで、一誠と夕麻の会話が聞こえる。「一実が」という単語が聞こえる為、一実の事を話題にしている事が分かる。

楽しそうな声音をバックに、一実は思考していた。思考しているのは、兄の彼女である天野夕麻についてだ。

柔らかい物腰と、随所に見える兄を立てるような言葉。見た目は、写真よりも美しく、一実にとっては残念な事だが胸はそれなり以上に豊満だった。これだけなら、いい彼女に巡り合つたと喜ばしく思えた。

だが、一つだけ気になる点が存在した。

「……あの目」

一実と一誠を見る、目。言葉にするのがひどく困難だが、一実にはとても不快であり、会話するのも息苦しかった。だから、自分からお茶の用意を建前に一度戦略的撤退をしたのだ。

オレは好きになれない。

それが、一実が天野夕麻に抱いた率直な感想だった。

一実は、熱いお茶の入った急須と三人分の湯呑みをお盆に乗せると二人の居る和室へと歩き出す。

今は巧く隠しているが、どうせいつかボロを出して破局するだろう。兄には悪いが、これも勉強になるだろう、と夕麻から向けられた目を性格の悪さを隠しているのだと解釈した一実はそう断じた。

襖を開くと、夕麻と一誠が笑顔を向けた。夕麻から感じる不快感を兄の笑顔を見る事で噛み潰しながら、一実は笑顔を作った。

天野夕麻は夕方には帰宅すると、入れ違いに両親が帰宅し、そのまま夕食になった。

「なあ、一実。夕麻ちゃんに会ってどうだった？」

モゴモゴと口に白米とおかずのハンバーグを詰め込みながら、少し聞き取りづらい声で一誠は一実に訪ねた。

「イツセー、食べながら喋るのはお行儀が悪いわよ」

「そうだぞ兄貴、てか何言ってるのかよく分かんねえ」

即座に母と弟に指摘され、米とハンバーグを飲み下した。改めて発言しようとした瞬間、しっかりと一誠の言葉を聞き取っていた父が疑問を投げ掛けた。

「イツセー、夕麻って誰だ？ 新しい友達か？」

「あれ？ 言ってなかったっけ。俺の彼女だよ」

「は？」

何気なく言い放たれた言葉に、一実以外の二人が固まった。

無意識に爆弾を投下してしまった事に気付き、一誠があつ、と声を漏らした時にはもう遅い。再起動した両親が鬼気迫る表情で詰め寄ってきた。

「イツセーっ！ それは本当か！ 誰だ！ 知り合いか！ 俺達が会ったことあるか！ 顔は、性別はどんなだ！ 美人なのかっ！ お前の妄想じゃないよなっ!!」

「イツセー！ 何処の出身か聞いた！ 性格はどうなの！ 詐欺だったらお金ないから払えないわよ！ 家柄は！ 身元調査は済ませた?! 貴方の妄想じゃないわよね！」

テーブルから身を乗り出した両親の質問攻めを受けて、目を回す一誠。ついでに質問内容が一実比べて悲惨だ。特に母は詐欺被害の可能性まで指摘している。そして二人共一誠の妄想だという疑いを忘れない。

「ひでえよ！ 妄想なんかじゃねえよ!!」

「分からんぞ母さんっ！もしかしたら性欲の暴走で幻覚を見たのかもしれない」

「ええ、一誠に彼女が出来るなんて夢物語到底信じられないわ！」

状況は更に悪化する。

一誠の肩を掴んでガクガクと揺らす二人。一誠はある意味厚い両親の信頼を感じて、本気の涙が零れそうになる。

頼みの綱である一実も、三人の様子を眺めてケラケラと笑いながら気楽に食事を進めている。薄情な弟の姿を見て、強引に巻き込んでやろうと声を出した。

「疑うんなら一実にも聞いてくれよっ！ 今日こいつに会わせただ」

「何だと。本当か一実」

突然話を振られ、矛先は一実に向けられた。さあ、無実を証明してくれ、と思う一誠の視界に一瞬意地の悪い笑みを浮かべる弟が映った。

「何の事だか理解に苦しみますな」

信頼する弟から発せられた裏切りの言葉。

そして、さつさと自分の食器を片付け、ついでに使い終わった食器も下げると、一実はぱつぱと部屋から出ていった。

「一実いいいいいいいい」

兄の叫びを背中に感じながら一実は階段の手摺りを掴んで二階へと上がった。

登り切って見える、兄の部屋の隣にある自室の扉を開いて電灯のスイッチを点けた。

勉強机とベッド、その他細かな家具のある一般的な男子の部屋。ベッドの枕元に置かれた『萌え萌え目覚し時計』が妙に異彩を放って

いるのが特徴的だ。兄にプレゼントした物とは色違いであり、こちらの方が少し高価だったのは愛嬌だろう。

一実は、勉強机に置かれたノートパソコンを開くと、椅子を引いて腰を下ろした。

パスワードを入力してロックを解除し、ホーム画面からインターネットに接続繋がると通販サイトとメモ帳機能を表示する。

タカタカとしばらくキーボードを室内に叩く音を響かせると、一階から一層大きな声が響き渡った。

「二実いいいいカムバアアアアアック!!」

救助を求める兄の叫びに、苦笑いを浮かべて一実は椅子から腰を上げた。面白そうだとしらを切ったのは一実であるため、一実はベッドに充電したまま放置してあるスマホを取ると、部屋の扉を開いて階段を降りた。

一実の予想通りに、両親の説得に苦勞している一誠の姿に大笑いして一誠の援護の為に一誠と夕麻、そして一実と一緒に撮った写真を両親に見せてやっと実在の人物であると信じてもらえた。

しかし、その後別の意味で狂喜乱舞する両親を宥めるのに苦勞するのは、流石に予想外だった。

兵藤家のいつも通り平和だった



太陽が登り始めて少しした、まだ薄暗い時間帯。朝早いどころではなく、いつも人が溢れている休日の街道も今はジョギングする人や部活に熱心な学生しか歩いていない。

そんな時間に、一実は早朝から開店している喫茶店で朝食を摂っていた。

基本的に休日は自宅で筋トレか読書を行う一実が、まだ寝てすらない時間帯に外出しているのには理由がある。

「兄貴、緊張しすぎだろ……やっべ、超眠い……」

モソモソと注文したサンドウィッチを食べながら見守っている兄が外出の理由である。

この日は前々から計画していた一誠と夕麻の初デートの日だ。初

めての彼女との初めてのデートともあり、緊張し過ぎたのか、一誠は五時に起床し一時間費やして身支度を整えると急いで待ち合わせ場所に向かった。お陰でまだ待ち合わせに三時間も猶予を残している。「……あと三時間もあんじゃん。……本でも読むか」

欠伸を一つ零すと、スマホのアラーム機能を三時間後に設定して、一実は小さいシヨルダーバッグから本を一冊取り出した。

少し遠くに見える兄に目を向けると、一実は本へ視線を落とした。少し大きいサイズの分厚い本には、『樹木神話』と金糸で書かれています。

三時間後、暇と緊張を持って余した一誠が目の前を通るメガネっ娘を数えて三桁に突入し、一実が本を半分まで読み進めた頃になって、天野夕麻が到着した。

アラームのバイブレーションでようやく気が付き、この日為に通販で秘密裏に購入した、側面に取っ手のついたオペラグラスで二人を見る。

「うしうし。『俺も今来た所だよ(大嘘)』クリアだな。テンプレはしつかりやらないとな」

お約束な台詞を言う夕麻に、一誠もお約束な台詞を返す。初々しい一誠に一実は思わずほっこりした。

二、三言葉を交わして歩き出す二人。一実は素早く会計を済ませると、長居したお礼を口にして二人を追った。

一実がデートを尾行しているのには勿論理由がある。

一つは、初デートでヘマをする兄を見て、帰宅後にそれを指摘して兄を弄り回そうと思ったこと。

もう一つは、天野夕麻の一誠と一実に向けた目が気になり、兄が心配になったからだ。

主目的は兄が初々しく気遣う姿に癒やされながら、いつか絶対にする小猫とのデートの参考にするため。

順調に進むデートに軽い違和感を覚えながら、一実は人混みを避けて二人を一定の距離を保ってストーカーキングする。

「あ、すみません」

突然、誰かとぶつかり反射的に謝罪を口にする。視線を向けると、フードを目深に被った人物と目が合った。実際には合ったかどうか分からないが、一実には不思議と合っているように思えた。

「……」

フードの人物は無言でチラシを差し出している。どうやらチラシ配りをしているようだ。軽く内容を見るが、怪しいことこの上なかった。

肩がぶつかってしまったため、断り辛く一実はチラシを受け取った。

「あっ……」

チラシ配りの人は、一実がチラシを受け取るとさっさと人混みに紛れて消えていった。

一瞬、何だったのだろうと思うが、自分の目的を思い出して即座に周囲へと視線を巡らせた。幸いなことに、兄の姿はブラコンセンサーで即座に見付かった。しかし、結構な距離が開いてしまっている。

「っ！ やっべ、急がないとっ！」

一実は素早くチラシをバックに詰めると、人混みを掻き分ける様に早歩きを始めた。

カバンに「貴方の願い叶えます」と書かれたチラシを入れて。



### lifa. 3 デート終わりのディアボロス

デートは順調に進行し、一誠と夕麻は終始笑顔であった。そしてデートの終わり、夕麻の誘いで夕暮れの公園に二人は訪れていた。勿論一実も隠れながら見守っている。

「今日は楽しかったね」

人のいない町外れの公園。その公園の噴水をバツクに微笑む夕麻の姿は幻想的であり、ひどく現実離れた霧囿気を纏っていた。二人から少し離れた一実が、オペラグラス越しで見惚れてしまうほどに。

夕暮れの公園、しかも二人以外の人影は一切見えない。これはもしや青〇ツとテンションが上がってしまうが、それ以上に一実の心には焦燥感が広がっていた。

(不味い、何か、変だ)

覚えがある。この感覚。一実が小さい頃、日常的に感じていた、とても怖い感覚。

一実が自覚し、思い出すのと同時に、その声は聞こえた。

「私達の記念すべき初デートって事で、一つ私のお願ひ聞いてくれない?」

嬉々としてお願いを聞こうとする兄の嬉しそうな横顔が見えた。

背筋に冷たい感覚が走り、心臓が握られたような緊張が一実の視界を白く染める。

そして、

目が合った。

「死んでくれないかな」

それは、一誠だけに向けられた言葉ではなかった。

一実と夕麻の視線はしっかりと合ってしまった。そして、一実が感じていた視線の正体が分かった。

「兄貴いいいいっ!!! 逃げろおおおおお!!」

次の瞬間、一実を駆け出しながら叫んでいた。

突然現れた弟に驚いた表情を浮かべて、次いで夕麻へと視線を移した。

翼を生やして光の槍を振りかぶる夕麻の姿を捉えた。

「うおおおおおおお?!」

人間離れたした反応速度で咄嗟に上体を曲げて、丁度鳩尾に突き刺さりそうになった光の槍を奇跡的に回避したが、無理な体勢となってバランスを崩してしまった。

「あら、弱めに投げたけど、避けられるなんて思わなかったわ」

少し意外そうな声で呟く夕麻。その手には既に二投目光の槍が握られ、バランスを崩した一誠へと向けられている。

不味い、と一誠が思うより速く、真横から衝撃が走った。

「うべあつー!」

変な呻きが漏れたが、何とか受け身を取って体勢を立て直す。横に視線を移すと、肩から血を流す一実が立っていた。

「素晴らしい兄弟愛ねえ。素晴らし過ぎて反吐がでちゃうわ」

二投目も一実が一誠を突き飛ばしたお陰で空振りした夕麻が不愉快そうな笑顔という非常に器用な表情を一誠達に向けている。

「兄貴っ!」

「ああ、とにかく逃げるぞ!」

二人は同時に足下に転がる小石を拾うと、即座に夕麻に向けて投げ付けた。野球部もかくやという速度で放たれた2つの小石は、軽く振るわれた夕麻の光の槍に触れただけで消滅してしまった。

だが、振るう一瞬を狙って駆け出した二人は、もう夕麻から五十メートル近く距離を稼いでいた。

「あら、鬼ごっこがお望みなものね」

薄ら笑いを浮かべて、夕麻は翼を広げて飛翔した。眼下で疾走する二人で遊ぶ為に。

「一実! 夕麻ちゃんから羽生えたんだけど?! 夕麻ちゃん天狗だったのか?!」

「多分天狗だ! 光の槍っぽいのを投げてきたのが引つ掛かるけど、女天狗の可能性が高い!」

全力疾走で走りながら夕麻の種族について考察する一実。

女天狗は驕慢な尼法師が変化した妖怪であり、天狗とともに世俗に紛れていると言われる。その際は、見目麗しい優美な女性となるそう  
だ。夕麻との共通点が中々多いため、一実はこちらだと判断した。

「っ！ 一実、前転回避！」

一誠の掛け声でほぼ同時に飛び前転を行う。

ズン、と背後で何かが刺さる音がして、一実の背中に冷たい汗が流れた。

「流石だ兄貴！ いつにも増して勘が冴えてる！」

「たりめえだ！ 命が掛かってんだからな！」

走りながら兄の勘を讃える一実。その肩からは血が滲んで上着を赤く染めている。

「一実、お前大丈夫か?! 結構深くまで抉られてんぞ！」

「気遣いサンクス兄貴！ こんな傷、三日もすれば治るから心配ご無用！」

「お前昔から傷の治り早かったもんな、でも消毒——」

一実の傷を早く治療しなければという言葉のを言い切る前に、一誠の背中に冷たい感覚が這い上がった。

「一実！ 横に飛べ！」

足に力を籠めて、走る勢いを更に加えて横に跳ねる。二メートル以上跳んだ一実の、さつきまで居た場所に槍が突き刺さっていた。ほんの瞬きする間に突き刺さる槍。一誠が合図してくれなかったら絶対に避けられない確信があった。

「イツセーくんのケダモノみたいな勘が結構鬱陶しいわね。ホントに人間？」

「うっせえクソ天狗！ 俺の事化かしやがって！ いつかそのおっぱい揉んでやるから覚悟しやがれ！」

天空で二人を見下しながら呟く夕麻に、最低な言葉を言い放つ一誠。

その言葉に夕麻は眉根を寄せた。

「天狗なんて下賤な輩と一緒にしないで貰えるかしら。私は高貴な墮

天使なんですから」

「……だってよ一実」

そつちに反応すんのかよ、と若干ツツコミを入れたくなるが、自分が先程ある程度の確信を持った推測がかなりの外れであったことに羞恥を刺激された。

「チクシヨウツ！ 普通に候補にすら上がらなかったわ！ てか何で外国の超有名種族が日本に生息してんだよ?!」

「いまから死ぬ貴方達に教える必要があるかしら？」

「死ぬのは確定事項ですかそうですか！」

もう数キロ全力で走っているのにも関わらず、叫ぶ体力を見せる一実。

逃げているだけでは罅が明かない。ある程度の会話をして意識を逸らそうとしているが、何時まで経っても撒ける気がしない。夕麻を見ても、本気で追っている様には見えない。

「でもねえ、私そろそろさ——」

状況を打開しようと思いを巡らせる一実の耳に時間切れの音が届いた。

突然、左足に激痛が走り、力が入らず一実は地面を転がる様に倒れてしまった。

「——飽きてきちゃったんだ」

「一実っ!!」

一誠の獣染みた第六感でさえ捉え切れない速度で放たれた槍。それに左脚の太腿を貫かれた。一実はもう、走れない。

全身に巡る様な痛みにも声も出ない一実へと駆け寄る一誠。その二人の様子を見ながら、夕麻はゆっくりと地上に足を着けた。その場所は、兵藤家の近くにある川原だった。

「凄いわよ二人とも。私ビックリしちゃったわ」

「てめえ……」

白々しく二人に賞賛の言葉を投げ掛ける。

一実を庇うように抱き上げながら、一誠は夕麻を睨み付けた。その視線は、数時間前まで仲良くデートしていた相手に向けることがな

い、敵意に満ちたものだった。

「墮天使の槍を避けたのよ。褒めてるんだからそんなに睨まないでよ。それに、恨むなら神セイクリッド・ギア器を宿した神を恨んでよね」

墮天使と人間の差は、熊と人間より広い。本来なら手加減した攻撃でも反応すら許さない速度である墮天使の槍を、一実たちは純粹な身体能力と人並み外れた一誠の第六感で避けきったのだ。そして生きようと知恵を働かせた一実。この土壇場で会話を行い意識を逸らそうとなど、普通は思い付かない。これを賞賛せずにはいられなかった。元々人間自体を下に見ていた夕麻でさえ、二人の生きようとする意志に心が打たれた。

「せ、セイ？ なんだって？」

「セイクリッド・ギアだよアホ兄貴」

夕麻から伝えられた一実も初めて聞く単語。思考と知識をフル回転させてそれが何なのか考える。相手の目的であるそれが、自分達に残された最後の打開策であると一実は不思議と確信が持てた。

（セイクリッド……神聖、尊ばれる……ギア……歯車、装置、装備つ……そして、神に与えられる……違う、違う、これもちがう……神話や伝承にこんな名称は存在しない、でも強いて関連付けるなら……！）

「神器っ」

「か、一実、どうした！」

「兄貴、恐らく俺等には神に位置する存在から何らかの道具が与えられている可能性がある！」

「はあっ！ いきなりどうしたんだっ」

いきなり良く分からない事を話し出した一実に狼狽えてしまう一誠。一実の必死の高速思考を覗く事が出来ない一誠には突飛な出来事を言っている様にしか見えない。

だが、夕麻は違った。

「今の一言でそこまで思考するとはね。君も予想以上に頭が回るみたいね、一実君」

キュオン、と甲高い音を響かせて光が細長い槍を形成した。そし

て、矛先は動けない一実へと向けられた。

距離は空から狙っていた先程よりかなり近い。狙いを外す事も、距離で速度が落ちることも、無い。

「頭が回る方から片付けるのが一番よね」

それは一実にとつて死刑宣告だった。それと同時に自分の浅はかさを悔んだ。

一実は、セイクリッド・ギアというものが体の、正確には魂など精神的な位置に結び付いている物だと考えた。故に、夕麻はそれを狙って近付いたのだと思っていた。襲うのは、殺した後邪魔な肉体が消えることで魂と結び付くセイクリッド・ギアを回収し易くなるのだと。

だが違った。回収が目的ではなく、排除だった。自分達にとつて最悪だったが故に切り捨てた結論が現実だった。

ヒュン、と風を切る音がして、鮮血が宙へ花卉の様に舞った。

「うっ、ぐうううっ!」

「お、おい、兄貴っ!?!」

呻きを上げたのは一誠だった。

咄嗟に獣染みた勘を最大限に働かせ、一実を押し倒すように庇ったのだ。そのせいで一誠の脇腹が大きく抉り取られてしまった。

「……私はイツセーくんの勘を見くびっていたようね」

呆れた様に夕麻が呟く。人間では不可避の距離と速度だと確信していただけに、シヨックも大きいようであった。

「あ、兄貴……何で……」

「何でじゃねえよ。目の前で弟に殺します宣言されてなのに、黙って見ている訳ないだろ。俺はお前の兄貴なんだよ」

だから――

荒く息を吐き出しながら今だ無傷である両足に力を籠めて立ち上がる一誠。脇腹から絶えず血が流れ続けるのも無用と断じて、面白そうに一誠を見つめる夕麻を睨み付けた。

「お前に格好悪い所なんて見せられないだろ」

自分を慕う弟を殺そうとする奴に立ち向かわない訳が無いだろ

一実の前に堂々と立ち、背中を見せる一誠。呼吸に合わせて上下す

る背中は、昔から変わらぬ、一実の憧れる兄の背中ヒーローだった。

「ああ、どうしましょう……私、本気で貴方に惹かれてるみたい」

「こつちからお断りだクソ駄天使」

一誠の目は生きる気力に溢れていた。諦めも絶望もなく、弟を救うために、自分が生き残るために夕麻に立ち向かうという覚悟が固められていた。

夕麻に、一誠を蔑む感情はもう存在していなかった。安っぽい兄弟愛を見せられた時は反吐が出たが、一誠の思いは本物だった。

殺してしまうのが勿体無いと思える程に。

「ねえ、イツセーくん。私の側に来ない？ 今なら一実くんの命を助けてあげるわ」

「誰が信じるかそんな甘言。死んでもお断りだな」

「……残念ね、なら、殺すしかないわね」

夕麻の勧誘を即座に拒絶した。初めてのフラレちゃったと夕麻は小さく、そして少し嬉しそうに呟く。

「兄貴！ 恐らくセイクリッド・ギアは精神と密接な繋がりがあある！

思え！ 兄貴はそういうの得意だろ！」

「ああ、大得意だっ！」

一実の言葉を聞き、夕麻を睨み付けたまま思う。脇腹から走る痛みで思考が歪むが、それも気にせずひたすら願う。生きる為の力を、弟を守る為の力を。

「いいわ。待っててあげるわ。あんまりレディーを待たせないで頂戴ね」

夕麻から声が掛けられるが、聞き流す。

すつ、と自分の左腕に僅かな暑さを感じた。その熱は段々と上昇し、腕が燃えているような感覚に襲われた。

「腕が、光ってる……」

一実の呟きに目を開けると、楽しそうに笑う夕麻と、光り輝く自分の左腕が見えた。

その腕を突き出す様に掲げた瞬間、ふっと光が消え去り、真っ赤に染まった左腕が姿を現した。

「龍……？」

自分の腕が変貌し、思わず一誠の口から眩きが漏れた。真つ赤な装甲、鋭角的なフォルムは龍を想起させた。そして、手の甲に嵌め込まれた宝玉。赤い籠手が一誠の腕に装着されていた。

トウフェイス・クリティカル  
「龍の手……意外ね、上の方々からは危険な神器だと言われたけど……でも、貴方ならそれも領けるわね」

「……？」

「身体能力を二倍にするありきたりな神器よ」

夕麻の返答に思わず真顔になつてしまふ一誠。派手な見た目なんだからレアで強力な神器であつて欲しかった。

「……ノーマルだつてよ一実」

「兄貴はガチャ運ないからしゃーないよ」

絶体絶命の状況だとは思えない程、気の抜けた会話を交わす二人。思わず笑いが零れてしまった。

肩の力が抜けたところで、一誠は具合を確かめる様に籠手の手首を動かした。

「随分と彼女を待たせるじゃない」

「俺の彼女はついさつき死んじまったよ——おらっ！俺の力を二倍にしてくれるんだろ？動いてくれっ！」

『Boost!』

籠手から赤いオーラが巻き起こり、一誠の体を包み込んだ。

「気絶ぐらいはしてもらうぞ」

「じゃあ死に物狂いで食らいついて来なさい」

次の瞬間、一実の目では捉え切れない程の速度でイツセーが夕麻を肉迫にした。風のような速さで目の前に現れた一誠、振りかぶられた赤い籠手を纏う左腕の一撃を、夕麻も光槍の斬撃で迎え撃った。

甲高い金属音と激しい火花を散らして、籠手と槍が交差する。初撃の衝突を皮切りに、二度、三度、四度と衝撃波を伴いながら何度も何度もぶつかり合う。

人間にとって一撃が致命的な光の槍も神器たる龍の手を容易く突破することは出来ていなかった。



「あはは、びつくりする程強くなったねイツセーくん」

「余裕そうな顔で言われても嬉しかねえよっ」

だが、純粹な技量と身体能力の差でか、籠手の装甲で受け流し切れなかった槍の刃が一誠の体に赤い線を幾筋も刻み付けていく。だが、一誠拳もまた、夕麻へと届いている。夕麻の服を破り、その柔肌に打撲と裂傷を刻み込んでいる。

ダン、と一誠と夕麻がほぼ同時に踏み込み、一誠の全力の拳と夕麻の本気の斬撃が衝突した。

暴風のように衝突の余波で衝撃波が吹き荒れた。川原の小石を巻き上げる様が衝撃の凄まじさを物語っている。

「ぐうっー」

全力の交差に打ち負けたのは一誠だった。夕麻が放つ斬撃の衝撃を受け止め切れずに、吹き荒れる衝撃の暴風と一緒に吹き飛ばされた。

吹き飛ばされながらも、空中で体勢を立て直して左腕を振り上げる一誠。地面に背中が触れるその瞬間に左腕を叩き付け衝撃を殺した。叩き付けた反動で少し浮かび上がった体を強引に立て直すと、無傷で着地に成功した。

(地力の差がでかすぎる。今はまだ対応できてるけど……)

脇腹から感じる痛み、今だに流れ続ける血液は、一誠のタイムリミットが着々と迫っていることを否が応でも理解させる。

そして視線を背後に向けると、ズリズリと自分達から距離を取る一実の姿が見えた。

(流石俺の弟だな。完璧な配慮たぜ)

傷を負った一実が近くに居ても、巻き込まれるだけで何の役にも立たない。逆に一実を巻き込まないように一誠が戦いにだけに集中出来なくなってしまう。最悪人質にされる可能性もある。

それだけに、一実の配慮は有り難かった。

(さて、弟のためにも、さっさと終わらせねえとな)

ならばやる事は唯一つ。

短期決戦。身体能力を二倍にするだけである一誠の神器では困難

を極める戦法。

だが、一誠には一つ切り札があった。博打であり成功するか分からない。しかし今はそれに賭ける。

「あら、何をやるの？」

一誠と夕麻の距離は凡そ二十メートル。一誠を吹き飛ばしてから息を整えていた夕麻は一誠の行動を見て疑問を口にした。

左腕を大きく振り上げている。二十メートルの距離、それを埋める力を一誠は持ち合わせていなかった筈だ。

(叩くの、この距離で?)

夕麻の疑問に応えるように、音声が響き渡った。

『Concentrate Boost!!』

全身から溢れ出していたオーラが龍の籠手に収束し、籠手の宝玉から眩い光が解き放たれた。

一誠の切り札。全身の強化を一点に集中させ、一撃の威力を大幅に強化する。龍の手の効果を聞いた時に思い付いた荒技。出来る確信はない。自分と弟の命をベットにした賭けに一誠は勝ったのだ。

「はああアアアツツ！」

叫びと共に繰り出された瞬間、夕麻の目の前に巨大な壁が出現した。

「これは予想外だわっ！」

迫りくる巨大な壁。津波の様な圧倒さを感じさせる巨大質量。

一誠の放った横に薙ぎ払うような一撃。その圧倒的な衝撃で巨大津波となった大小様々な石。天然物の凶器による範囲攻撃。墮天使である夕麻も、これ程の質量に押し潰されれば無事ではいられない。ならば防御するしかない。

右手を掲げた夕麻の掌に、巨大な光の槍が形成された。見るからに凶悪な威力を感じさせる巨大槍を、夕麻は握り潰すように圧縮する。握り締めた指の隙間から溢れ出す光。その光力を殴りつける様に壁へと解き放った。

放たれた光は巨大な爆発を巻き起こし、爆音を轟かせて質量津波を消滅させた。

だが、光が消えた先に一誠の姿は無かった。

『Concentrate Boost』

「おおおるあああああつ!!」

天から、赤い流星が落ちてきた。

赤いオーラを籠手からジェットのように噴出させながら、鬼神のような表情をした一誠が一直線に夕麻へと滑空する。握り締められた拳は夕麻の顔面に向けられている。

「ぐ、あアツ！」

圧縮砲を放った直後の夕麻は満足に動けない。咄嗟に槍を形成して受け止めようとするも間に合わなかった。

一誠の渾身の拳は夕麻の顔面を穿った。

収束強化された一撃は、夕麻を吹き飛ばし、その衝撃は川原に大きなクレーターを作り出した。

「はあ……はあ……俺の勝ちだ」

砂利が巻き上がり、クレーターの中に居るだろう夕麻の姿は見えない。だが、一誠は確かな手応え感じていた。

▼△▼

セイクリッド・ギアを出現させる事が出来なく、そして足に傷を負った自分が居ても兄の邪魔になると、距離を取っていた一実は、背後でいつそう大きな爆音と衝撃の暴風を感じて、思わず後ろを振り向いた。

最悪の状況を想像するが、一実の目に映ったのは、赤いオーラを噴き上げ夕麻を殴り飛ばす一誠の姿だった。

「兄貴、ホントにやりやがった！」

歓喜と安堵で声を張り上げた。だが、兄の状況を思い出してすぐにアホ毛をピンツと立ち上げた。

「兄貴いいいいい！ 大丈夫かあああ！」

一誠は、脇腹からの多量出血、全身に刻まれた切傷、これだけでも重症だが、追加で神器の無理な行使による筋肉の裂傷と左腕の疲労骨折と、恐ろしく瀕死の状態だった。

足に穴を開けられたぐらいで痛がつてる場合じゃないと、足から這

い上がる激痛を無視して一誠へと駆け寄る一実。

近くに見えてきた、一誠が一実へと力無く手を振っているのが分かり、思わず安堵の溜め息が漏れた。ガスが抜けるように吐き出される溜め息と一緒に足の力が抜けてしまい、盛大にすっ転んでしまった。

「おい、お前こそ大丈夫かよ」

苦笑い気味に呟かれた言葉。一誠の近くで転んだために、よたよたと一実の前まで来ると上から覗きこむようにして右手を差し出した。

「兄貴、お疲れ様」

その手を取って、膝立ちの状態になりながら一誠を見上げた。

見る人を安心させる太陽のような笑顔を浮かべる一誠に向かって  
労りの言葉を掛けた。

「早く治療受けないと不味いだろ、さあ、帰ろうぜ兄ちゃん」

ここで終われば、ハッピーエンドのエンディングになるだろう。

「ああ、帰ろうか、かず——」

だが、コレは始まりだ。神は、平和なハッピーエンドを認めてはくれない。

トスン、と一誠の胸から光の刃が生やされた。

「……えっ」

ふつと光が消え去ると、堰を切ったように血が溢れ出した。

握っている一誠の手が急速に冷たくなる。

「あ、兄貴いいいいいい!!!」

一誠の膝から力が抜けて、一実の方へ倒れ込んだ。受け止めるが、重い、とても重い。まるで水の一杯に入ったタンクを支えているようだ。体に全く力が入っていない。

「おい、おい確りしろ、兄貴!」

反応が返ってこない。

「兄貴、ふざけんなよっ! まだ兄貴を結婚式に呼んで自慢してねえだろ!」

地面に下ろして傷を確かめる。ぽっかりと開いた胸の穴。一誠が生きていないのは一目瞭然だった。

「クソツ、どうしたら良い?! 助けてくれよっ……誰でも良いから兄

「ちゃんを助けてくれよっ」

無力な自分にここまで苛立ちを覚えた事はなかった。だが、どんなに喚いても現実是不変ならない。無力な少年の叫びに応える人は居ない。

「兄ちゃん……っ。……ちくしょうっ」

もう、言葉を紡げなかった。

ただ胸中に空虚さと絶望感が広がるばかりだった。

「当たったかしら？」

一実の耳に、声が届いた。忌々しい声が。

「歯が砕けちゃったわ。流石ね。もう二倍強化されてたら頭が飛んでたわ」

クレーターから抜け出して、手の平に砕かれた歯を吐き出す夕麻。

一誠の全身全霊でも、夕麻を戦闘不能にすることは叶わなかった。

「でも、これで終わりね」

スウ、と夕麻の手に光の槍が形成された。

「ホントはね。今日殺す気はなかったのよ。目標には一実くんも含まれてたからね。だから、イツセーくんに近付いたの」

一誠の亡骸の前で俯いている一実にゆっくりと歩み寄りながら語り掛ける夕麻。

「私、兄弟とか居ないから、イツセーくんみたいな人って初めてだったの。二人揃った所で殺そうと思ってたから、もう少しこの関係が続けても良いかなって」

「……」

一実から三メートル程離れた所で夕麻は止まった。握る槍の輝きがゆっくりと増していく。

一実は俯いたまま動かない。

「今日のデート、中々楽しかったわよ。でもね、危機感を覚えたの。入れ込み過ぎたら殺せなくなるってね。だから、丁度一実くんもついて来てこの日にしたの」

人二人なら容易く消し去る威力を孕んだ光の槍を投げる体勢を取る。楽しませてくれた、人の強さを見せてくれた愛しい人とその弟に

向けるせめてもの慈悲。

「素晴らしい出会いを有り難う、神の子たち。痛みもなく一瞬で葬つてあげる」

手負いの自分が放てる最大威力の光の槍。振りかぶったそれを――

――飛翔して地面へと放った。

光の槍が爆発した事で軽く吹き飛ばされながらも即座に体勢を立て直す。

「ハッ……ハッ……！」

――死ぬかと思った。

二人に槍を投げようとした瞬間、確かに感じた、死の予感。背筋が凍り付いたように思える程の圧倒的殺意。

視線を下げる。自分がさっきまで立っていた場所を視界に移動させた。

「……剣？」

それは針山だった。

地面から数えるのも億劫になる程、膨大な数の刀剣が突き出し、折り重なる様に山を作っていた。一部が抉られた様に消滅しているのは、夕麻の放った槍を受けた為だろう。

「……の……が……あ……」

消え入りそうな程小さい声が、夕麻の耳に届いた。

視線を向けると、一実が相変わらず俯いたままている。だが、その手には一本の剣が握られ、地面へと突き立てられていた。

「一実くん……あなた……」

何か言葉を絞り出そうとした瞬間、一実が顔を上げた。酷い顔だった。

頬は涙で汚れ、目は充血と憎悪で血走っている。表情は悪鬼の如き怒りを顕にしている。負の感情を凝縮したような、あまりにも悲愴な顔だった。

「穢らわしい、低俗な腐れ人外がああ嗚呼あああああああ！」

憎悪、後悔、絶望、悲哀。人間の抱える悪感情が全てをぶつけられ

たような感覚が夕麻を襲った。

体の底からビリビリと恐怖に近い興奮が這い上がってきた。

「やっぱり、兄弟なのね」

一誠から感じた守るという覚悟。一実から感じる絶大な殺意。方向は正反対だが、根底は同一。大事な家族に対する深い情愛。

地面から出鱈目に剣や銃、砲塔や巨大な斧が無数に顕現し、その全てが夕麻へと向けられている。

その殺意さえ夕麻は愛おしく思えた。人間の感情が尊いものだと思えた。

「ズタズタにしてやるっっ！」

「良いわ、相手してあげるー！」

夕麻が両手に槍を形成しようとした瞬間、赤い魔法陣が出現した。

「この紋章、グレモリーの……チツ、無粋ね」

この土地を支配する悪魔の紋章を見て、夕麻は舌打ちをした。夕麻の行いは墮天使としての仕事でもあるため、目撃されても特に咎められる謂れはない。だが、今回は被害を出し過ぎてしまっている。現場を抑えられると色々と面倒な事になる。

夕麻は変わらず自分に殺意の眼差しを向けている一実へ親愛の笑顔に向けた。

「邪魔が入っちゃったからまたいつかね、一実くん」

「あああ?! 待ちやがれっ、逃げんじゃねえよド腐れビッチがあああっ!!」

地面から生えた砲塔に光がチャージされる。

「くたばれっ！」

無数の砲塔から極太の光線が放たれた夕麻に迫る。

一撃で夕麻を殺し切る光線を高速の飛行で避け、夕麻は一実の視界から消えてしまった。

「逃がす——カハッ」

追い縋ろうと立ち上がる一実の視界が歪んだ。体から力が抜け、その場で倒れ込む。

憎悪で染まった精神で何とか意識を繋ぎ止める、そうしていないと

即座に意識を失ってしまいそうだ。

「く……そ……兄ちゃん……」

視界がぼやけてもう焦点も合っていない。なけなしの意識で思考するのは兄の事だった。

気絶寸前の一実。憎悪で気付いていなかったが、一実の横、丁度一誠の頭の上に出現していた魔法陣が急激に輝きを増させた。

その光景を一実は霞んだ思考で見ていた。

「……転送妨害の術式が煩わしいと思っていたら、凄まじい状況ね」

意識が途切れる間際、魔法陣から現れた鮮やかな紅色が霞んだ視界でもはつきりと分かった。



lif a. 4 赤い夢と部活訪問

昔、一誠は川に足を滑らせてしまった一実を飛び込んで助けた事がある。

溺れる一実を抱き締めて、我武者羅に陸まで泳いだ。一実は何とか陸に上げたが、今度は一誠が何か引つ張られた様に流され、そのまま沈んでしまった。

父が一誠を引つ張り上げて何とか事なきを得たがその時の記憶は今だに色褪せていない。

——今、一誠が感じている感覚は、その時に感じた感覚に酷似していた。

(俺、死ぬのかな……)

夕麻の放った槍を胸に受けた一誠。視界が真っ暗になり、何処までも深く沈んでいく感覚に、明確な死を連想した。

(死にたくねえなあ)

まだ、悔いが沢山残っていた。

まだ童貞だって捨てていない。おっぱいを揉んだこともない。キスも、深い方のキスもしていない。エロい事が何一つとして出来ていなかった。余りにも、余りにも心残りだった。

そして何より、

「おいっ、確りしろ、兄貴！」

弟の一実が、一番の心残り、いや、後悔だった。

聞こえる弟の声は、久しく聞いていなかった涙声。もう体の感覚もない一誠へ、必死に声を掛けている。

情けない。どうしようもなく、情けない。守ると言ったのに。この

ままでは一実も殺されてしまう。

(……死ねないな……まだ、死にたくない)

何故こうなったのか。そんな事は決まっている。

(……俺が、弱いから……だから——)

理不尽、不条理、不幸、苦痛。そんなモノに晒され、命を奪われてしまうのは何故か。弱いからだ。体が、心が、精神そのものが弱いか

らだ。

弱いから、失うのだ。

——力が欲しい、強くなりたい

純粹なまでの力への渴望。本来なら何の意味も持たない願望。

それに応える者がいた。

『届いた。ああ、やっと届いたぞ』

一誠の視界が鮮烈な赤で埋め尽くされた。

音も光も無い暗闇に、突然現れた極大の存在。

火山から流れるマグマの様な真紅の鱗に包まれた圧倒的巨体。いつか旅行で見た、樹齢千年の神木よりも太い腕と足。大きく裂けた口。頭には鋭く、太い角が並んでいる。堂々と佇む姿は帝王の様な風格を纏い、大きく開かれた翼が、迫力をより一層圧倒的なものとしている。

そして、血の様に赤い瞳には慈愛が宿っていた。

(……ドラゴン?)

一誠は理解できていた。目の前の存在が、自分を殺した夕麻より遥かに強大な存在である事が。

何故、そんな存在が目の前にいるのか理解出来なかった。そんな一誠を、凶悪な顔に優しさを滲ませたような表情で赤い龍は見下ろした。

『そうだ。俺は龍帝。お前達をずっと、ずっと見守ってきた龍だ。愛しき相棒よ』

困惑する一誠に龍はそう言葉を告げた。

(相棒? ずっと見守っていた?)

『そうだ。お前が求めなかったから、望まなかったから、俺の声はお前に届かなかった。……唯見守っている事しか出来なかった。だが、それももう終わりだ』

そう言葉を切ると、巨大な双翼をはためかせた。

そして、暗闇を吹き飛ばす様な咆哮が轟いた。

『力を望む者よ! 愛しき新たな担い手よ! 刮目し、その魂に刻み込め! 我が名は——』

左腕に耐え難い熱を感じた。

左腕へ目を向けると、いつの間にか装着されていた龍の手の形が変形し、紋章が浮かび上がっていた。

▼△▼

『……お兄ちゃん、起きてる？ 起きてないよね。えへへ、じゃあ、朝の健康管理……始めるね』

枕元から聞こえる妹の声に、一誠の思考は即座にクリアとなり、完全覚醒を果たした。今から起きるお愉しみを寝過ぎすなど一誠にとって有り得なかった。

「……朝か」

妹の声が目覚まし時計のボイスだと理解した瞬間、壮絶な虚しさと寂しさが一誠に襲い掛かった。

買い替えてから、グレードアップした目覚まし時計は、声優の演技の秀逸さと一誠好みのシチュエーションにより、値段を遥かに超える価値があった。

だが、問題点としてこの寝起きから賢者タイムとなる事があった。

「……兄貴と同時に酷え起き方するのに、この上ない幸福と情けなさを感じるぜ」

隣から聞こえた声に、一誠は視線を向けた。

ベッドの隣には椅子に腰掛けて膝掛けを畳んでいる、寝間着姿の一実がいた。

「……おはよう、一実」

「ああ、おはよう兄貴」

目が合うと挨拶を交わす二人。だが、それきりでパタリと黙り込んでしまった。いつも一緒にいると喧しいこの兄弟では考えられないような空間が出来上がった。

「……」

「……」

二人の間に気不味い空気が流れた。

一誠も一実も、相手に負い目を感じ、責任と罪悪感を抱いている。話したい事や聞きたいことが沢山あるが、自分から言うのには少し勇

気が必要だった。

「……なあ、一実」

先に沈黙を破ったのは一誠だった。

「どうした、兄貴」

「怪我、大丈夫か？」

一実の肩に巻かれた包帯。薄手の寝間着ではその形がくつきりと浮かび上がってしまったている。

それは、昨日出来事が夢などという都合の良い考えを打ち砕く証拠でもあった。

「ああ、肩はもう治ってる。足はまだだけど、心配するほど深くないよ。ありがとう、兄貴」

「そうか……良かった」

一誠は安堵の溜息を吐いた。その時に自然と手を胸に当てていた。そこで、自分の体に違和感を覚えた。

「……一実、俺なんで生きているんだ？」

水底に沈んでいくようなあの感覚、逃れられない死の予感を一誠は確かに感じた。

だが現実には、自分は生きている。弟と顔を合わせていつもの様に会話している。そして、起きてから感じる異様な倦怠感。力が湧かず、性欲も微妙に減退しているような気がした。

「……………兄貴、それなんだけどな」

一誠と合わせていた視線を逸らして、少し言い淀む様に一実は言葉を絞り出した。

「少し、事情があつてな……」

「事情？」

「ああ。今日の放課後に、兄貴の所に関係者が行くって言っていたよ」  
「……言っていたって事は、一実は誰かと会ったのか？」

「うん。その方が、兄貴を助けてくれたらしい。詳しい説明は関係者について行けばしてくれらるって」

「……………そうか」

そう言つて、一誠はボボンと枕に頭を預けた。

何がどうなって自分が助かったのかは全く分からないが、一実が何かを隠しているのは分かった。それに対して疑問が無いと言ったら嘘になるが、それ以上に弟を信頼している。だから、深く追及しようとは思わなかった。

「……一実も、来るのか？」

寝転んだまま、一実に問い掛けた。敢えて主語が抜かれた分かりにくい言葉で。その言葉でも、一実には伝わったようだ。

「俺も当事者だし、直接話したからな。行かない訳がないよ」

「そうか。お前がいるなら、安心だな」

朝の倦怠感のせいなのか、少し元気の無い笑顔を一実に向ける一誠。

「なあ兄貴、体調は悪くないか？ 悪いなら、学校にも連絡するから、今日は休んで放課後に話しを聞きに行っても……」

「ハハハ、そんな心配すんなよ一実。確かに力も性欲も減退しているけど、大丈夫だって」

元気の無い様子がする一誠へ心配の声を掛ける一実。そんな弟に笑いながら応えた。

「それなら良かった……ん？」

一誠の口から出た言葉に、一実は耳を疑った。一誠が、あの一誠が、性欲の減退を訴えるなど、最早体調不良などでは済まない。

「やっぱり休め兄ちゃんっ！ 俺が連絡しとくから心配すんな。今すぐ精力剤とエロ本持つてくるから待つてろ!!」

「いやいやいやっ、待て早まん！ 何で性欲の減退でそこまで心配されんだよ?!」

「性欲が減退した兄ちゃんなんて、残りっカスしか残んねえじゃんか！」

「酷えよ！ 俺の存在大体性欲じゃねえか!?!」

「とにかく寝てろよ！」

急いで部屋を出ようとする一実。それを飛び起きて羽交い締めにする一誠。ドタバタと騒がしく取っ組み合う二人。

そんな二人を目覚まし代わりに両親は起床し、二人に声を掛けて、

しばらくすると二人は大人しく一階へ降りて行った。  
兵藤家のいつもの朝が訪れた。



学校のクラスで、最低でも一人、変わった人がいる事がある。オタクと呼ばれる者だったり、個性が無駄に強かったり、変態性が高かったり。兎に角キャラが濃過ぎる人がいるだろう。

そんな人は二通りに別れる。排他の対象か受け入れられるか。つまりイジメか慣れられるかだ。最近の学校では大体後者になる事が多く、イジメの対象となる事は少ない傾向にある。最低限のコミュ力と友人がいることが前提だが。

何が言いたいかというと。

どんなド変態がいても、人間は慣れる生き物だということだ。

塔城小猫のクラスには変態がいる。

まだ生徒の姿も疎らな朝の教室。教室にはまだ数える程の生徒しか居ない。

小猫は教室の扉を開くと、自分の机向かって歩いた。

「あ、おはよー小猫ちゃん」

「……おはよう」

級友からの挨拶に返事をする。そして、自分の席に着いた。

「おはよう。小猫ちゃん」

「……おはようございます、一実くん」

笑顔で掛けられた声に、返事をした。

兵藤一実。小猫が入学して初日から積極的に話し掛けてきた、高校での初めての友人だ。そして凄まじい変態でもある。

「……今日は何ですか?」

「フルーツサンドとキャラメルロールだよ」

下から伸びてきた手に握られた小包を受け取ると、小猫は封を開け始めた。

一実の上で。

「……今日は何時から居たんですか?」

「小猫ちゃんが来る五分前だよ。ちょっと危なかった」

「……そう言っても私より早いのはやっぱりキモいです」

そう言つて、一実から受け取ったフルーツサンドを食べる小猫。フルーツサンドとキャラメルロールは両方とも一実の手作りだ。四つん這いになっている変態を座椅子にして白髪の美少女がお菓子を食べる光景は、あまりに絵面が酷い。

「お、一実おはよう。俺等の分はあるか？」

「来て早々にタカるとはいい性格してんな。カバンの中に残りがあるから欲しいなら勝手に取つていいぞ」

「流石太っ腹だな！　じゃあ頂くぜ」

座椅子になっている一実に話し掛けるクラスメイト。小猫の隣に位置する一実の席に、次々と人が集まる。誰一人として、一実の行動にツツコミを入れない。それがもう『いつもの光景』だからだ。

入学して早々、犯罪的な容姿をしている美少女に話し掛け、好きだと聞いた次の日にはお菓子を持つてくる。更には手作りまで手を出す。挙句の果てには椅子になる。そして、小猫の居た空間でひたすら深呼吸をしている事も目撃されている。

一実の入学から始まる変態行動は、もうクラスメイトにとっては日常と変わりなかった。一実が病欠して、小猫が平穏な一日を過ごしている方に違和感を感じる程には。

「ほらーホームルーム始めっから席付けー。……お前もだぞ兵藤」

バシんと、プリントの束で少し強めに一実の頭が叩かれた。担任も、もう慣れてしまったのか、対応が適当になっている。

「あと、あと十秒だけお尻の感触を楽しませてください！」

「仕方ないなあ……あと十秒だけだぞ」

「……私の意思はないんですか」

小猫の眩きは教室の喧騒に飲み込まれて消えていった。



騒がしくも相変わらず退屈出来ない一日が終わり、放課後のチャイムが響いた。

そろそろと生徒達が下校か部活に向かう中、小猫はカバンを背負う

一実に声を掛けた。

「一実くん、少しいいですか？」

「ん？ どうしたの小猫ちゃん。オレ行かなきゃいけないところあるから急ぎでお願い」

「その事です」

「……分かった」

小猫は、彼女の主から一実を連れて来るように頼まれていた。一実の性格上有り得ないが念のためという理由でだ。

事情を知らない小猫からしたら、突然自分の友人が呼び出された事に驚きを感じていた。理由を聞いたが、詳しくは本人を連れて来たら一点張りだった。

「じゃあ、行こうか」と一実に声を掛けられた。小猫は自分の鞆を手に取ると、一実と隣り合って教室から出た。

背後で、

『お、おい。今の見たか？』

『ああ、一実と小猫ちゃんが一緒に出て行ったな』

『もしかして、もしかしたのか？』

『したんじゃねえかな』

『やっぱか！ くうう、一実死ね！』

『ああ、そうだな。羨ましいな一実死ね』

そんな会話が少し離れた教室から聞こえてきた。

何がもしかしたのか気になるが、小猫にとって知っても後悔しかないのは確かだった。

廊下の喧騒の中、一実が問い掛けてきた。

「小猫ちゃん。旧校舎に來いってオレは言われたんだけど、何があんの？」

「私の部活です」

「……小猫ちゃんって、部活入ってたんだ。……何の部活？」

一実の問い掛けに、小猫は短く答えた。

今までよく話してきたが、一実が帰宅部という都合上、部活を話題に挙げることはなかった。一実にとって本来なら喜ぶべき新しい



情報なのだが、この状況で言われると、悪い予感しかしなかった。  
「オカルト研究部です」

一実の苦手な部活上位の名前が、小猫の口から飛び出した。

## lif a. 5オカルト研究部とレア兄弟

オカルト研究部。一実はこの手の部活にあまり好意的な印象を抱いていなかった。

理由は、単純。活動内容が好きでないのだ。

異世界との交信。地球外生命体との接触。UMAの発見。エトセトラ。

部活動の範囲で出来ていたら、研究所の存在自体不必要になる。それに、

本物を見て、そういう存在を知ったら。恐らくそんな活動はできなくなってしまうから。



小猫と一緒に旧校舎へと歩を進めて数分。一実は上機嫌だった。

頭のアホ毛を尻尾のように左右させている一実。オカルト研究部というあまりにも胡散臭い部に向かうのは気が進まないが、何よりも小猫と一緒に歩いている事が嬉しく楽しい。

学校の裏手にある旧校舎へと歩く。木々が並ぶ林を抜けると、木造の校舎が見えてきた。

「……………ですよ」

「あれ、もう？ ……おー、思ってたより綺麗だね」

基本的に旧校舎へ一般生徒が近づく事はない。不気味な噂や七不思議の類がある訳でなく、そもそも近寄る理由がないのだ。

一実も存在や位置は知っていたが、今日までその姿を見ることは無かった。

実際目にとると、外観はかなり古く感じるが、汚いといった雰囲気は無い。校舎に刻まれたキズは分り難くするために修復された痕が見え、ガラス窓は割れてすらいない。古いだけで、状態だけなら現役で使われていても不思議でない程には綺麗に手入れされている様に見える。

「……………少し綺麗過ぎない？」

「私達が使っている都合上、汚くしておくのは問題ですのぞ」

少し違和感を覚える程に整備されている旧校舎を見て一実が小猫に問い掛けた。一部活動を行うのに、ここまで校舎を整える必要はないはずだと、そんな意味の言葉を。

それに素つ気無く答えて、小猫は旧校舎へとさっさと入ってしまった。少し置いて行かれ気味の一実は小走りで小猫に続き、校舎に入る。

校舎の中もやはり綺麗に掃除がされており、目立った損壊もない。

一実が物珍しげに校舎内を見回しているのを横目に、小猫は階段を登り始めた。一実も気付いて後を追う。

階段も軋みを上げることせず、古い外観に反して非常に安心感があつた。

旧校舎の見た目はアンバランスにも思える丈夫さに一実が感心している、小猫の足が止まった。

突然の停止に、小猫にぶつかってしまった。

「……やるね、小猫ちゃん」

「……いきなり変態行動をするのはやめて下さい。激しくキモいです」

「そう言いながら慣れちゃってる小猫ちゃんステキ」

訂正。ぶつかるフリして抱きつこうとした。だが、素早く一実の腕を掴んだ小猫により無力化された。

最初は許可を取って撫でようとしてきたが、お菓子の効力で許可を繰り返してしまい、拒絶しなければ抱き着くまでは、隙を伺って仕掛けてくるようになった。

小猫も、この程度はスキンシップやじゃれ合いの範囲内だと認識していた。

「……入りますよ」

「あいあいさ」

小猫が声を掛けると、一実はさっさと腕を解き、小猫が止まった教室の扉に顔を向けた。扉にはプレートが掛けられ、『オカルト研究部』と書かれている。

「……一実くんを連れてきました」

小猫が中へ確認を取ると、「待ってたわ、入ってちょうだい」と言う声が帰ってきた。一実が昨晚話した声と同じだった。

小猫が扉を開けて中に入るのに続いて、一実も室内に入った。

一実の視界にまず飛び込んで来たのは文字だった。

見たこともない文字と数字らしき単語が羅列し、幾つも陣を作っていた。

(魔法陣……？ いや、数秘術の要素も取り入れられているから……この場合は魔方陣か?)

陣は数字が中心に展開され、文字は補助的な位置にあるように見える。そこから一実は陣を魔方陣だと認識した。

特徴的な魔方陣以外には、多数の書物が収められた本棚、落ち着いた色合いのソファ、窓を全て覆い隠す遮光カーテン等様々な調度品が設置されている。豪華だが、気品を感じる部屋だ。とてもオカルト研究部の部室だとは思えなかった。

そして、ソファに座り、優雅な雰囲気で一実に笑顔を向ける人物に、一実は視線を向けた。

「待ってたわ、一実くん。まだ全員揃ってないから、少し座って待っていてちょうだい」

紅い長髪に蒼い双眸、そして人間離れた美貌。ただ声を掛けられただけなのに、心臓を掴み取られた様な感覚を一実は感じていた。学園で『二大お姉様』と呼ばれる美少女。リアス・グレモリー。

ふざけた返事を返す気にもならず、一実は「はい」と返事をする、ソファに座った。

すう、と体重が吸い込まれる様に感じた。柔らかさ、座り心地ともに一級品だった。

「ソファ、気に入ってくれたかしら。実家から取り寄せた一級品よ。私も気に入ってるの」

「……あ、ヤバイですね……気持ち良すぎて立ちたくなくなりそうです……」

「一実くん、ニユウドウカジカみたいな顔していますよ……」

「キモいより尚更酷いよねそれ」

リアスと目を合わせてから、少し緊張していた一実の力が抜けた。表情筋が弛緩した顔に、リアスは笑顔を見せるが、一実の隣に座る小猫は辛辣な言葉を呟いた。

あんまりな言い草に、一実が抗議していると、部屋の奥から足音が近付いて来た。

「あら、その子が例の？」

歩いてきたのは黒い髪を長いポニーテールにしている、今亡き大和撫子のような雰囲気を漂わせた女性だった。『二大お姉様』の称号をリアスと共に持つ美少女、姫島朱乃だ。彼女はお盆を運んでおり、その上には急須と湯呑が置かれている。

「そうよ。私を振った弟くん」

ねえ、と一実に流し目をする。恐ろしくて一実は目を絶対に合わせないようにしながら、カバンを探っている。その様子に小猫が眉根を寄せた。元々良く分からない状況なのに、リアスの言葉と一実の行動で余計に事態の把握が出来ない。ついに我慢し切れず一実に問い掛けた。

「……部長を振った？」

「あつ、良かったら羊羹持ってきたんで食べませんか?！」

子供でも分かる露骨な話題変更。

一実は素早い動作で二本の羊羹を取り出し、いつも持ち歩いている切り分け用のナイフで切り始めた。

朱乃が気を利かせて持って来た小皿に均等に分ける一実。小猫の羊羹が少し大きい事に、さっきの話しは聞かなかったことにして欲しいという意志が感じられた。しかし、その程度で釣られる小猫ではない。

「一実くん、しっかりと分かるように説明し——」

「スルーしてくれるなら『馬面堂』の羊羹丸々一本贈呈」

「……今回は見逃してあげましょう」

量を提示されたら仕方ない。

一実に詰め寄ろうと腰を上げていた小猫は静かに座り、他の皿より

も一回大きい羊羹に一実が持つて来た和菓子用フオークで食べ始めた。

どうにか問題を先送りにした一実は、安堵のため息を吐くと小猫に笑顔に向けて言った。

「小猫ちゃん。今オレの膝に座ってくれたら明日のお菓子は——」

ぽすんっと、言い切る前に小猫が一実の膝に腰を掛けた。小猫の体臭、小猫の重み、小猫の柔らかさ。そして即座に座ってくれた事に対して、一実は片手で顔を覆って歓喜に震えた。

「……面白い子ね」

「そうでしょう?」

羊羹を口に運んでいたリアスと朱乃は、二人の様子を眺めてクスクスと笑っていた。

それから十分して、大分疲れた様子の祐斗が一誠を連れて部室に戻った。

遅れた理由に祐斗は、「同じ生き物とは思えない様な速さで逃げられた」と言った。

その件に関して当の一誠は、「イケメンが笑顔で追っ掛けて来たから全力で逃げた」と返答した。

追いかけるイケメンか、逃げる二枚目半か、どちらが悪いのか分からないまま、話しは始まった。

▼△▼

面々が揃い、和気藹々とした雰囲気霧散した。

一誠と一実、ついでに一実の膝に座って羊羹を食べる小猫の正面に、テーブルを隔てていリアスが座り一誠と一実を見ている。

圧迫面接の様な構図に、一瞬胃が痛くなる一誠だが、モクモクと羊羹を口に運ぶ小猫を見て即座に和らいだ。

「最初に聞いておくわ。手短に単刀直入で説明されるのと、ゆっくり丁寧に説明されるの、どちらが良いかしら?」

「え……じゃあゆっくりで」

リアスの言葉に一誠が答えた。

何故だが学園一のクソイケメンに連れて来られた先は旧校舎の才

カルト研究部——オカ研と部員達は略していた。そして部屋には二  
大お姉様と学園のマスコットを膝に乗せる弟。

全く状況について行けなかった。

「じゃあまず、一誠くん、貴方昨日のことは覚えてる？」

「……………はい」

少し表情を暗くする一誠に、リアスは少し申し訳無いと思いつつながら話し始めた。

曰く、自分達は悪魔であり、オカ研は活動を円滑にするための隠蓑である。一誠達が襲われた日に一実が持っていたチラシで呼び出され死亡した一誠を生き返らせ、悪魔にした。

曰く、襲ったのは墮天使であり、自分達は悪魔と古来より敵対している種族である。彼等の目的は敵対する可能性のある神器所有者を殺害、または勧誘して脅威の排除と自陣営の戦力強化である。

「と言う事よ。分かったかしら？」

「は、はい……………なんとか」

一通り話すと、リアスは一誠に確認をとった。一誠も何とか理解出来たようで、少々不安な返事を返した。

そして、今度は一誠が確認を取るために声を出した。

「お、俺、人間じゃなくなっただけですか？」

「ええ。もう死んでしまっていたから、それ以外貴方が助かる方法はなかったの」

「……………一実も、悪魔になったんですか？」

小猫の頭に顔を埋めて、柔らかそうな頬をツンツンしている一実を見ながら、一誠は問い掛けた。

「いいえ。彼も勧誘したけど、強く断られちゃったわ」

「そうですか……………。一実、何で断ったんだ？」

さつき聞いた話して悪魔についての説明もされていた。悪魔は寿命が非常に長く、身体能力も人間と比べるまでもなく高い。五感も強く、魔力と呼ばれる力を備えている。代わりに朝に弱くなったり、十字架等の聖なる物や光に滅法弱くなる。デメリットもあるが、それ以上に魅力的なメリットが多い。特に身体能力の向上は一実にとって

最も魅力を感じるメリットだ。

一実を知るからこそ、一誠は疑問に思った。

「……兄貴は不可抗力だから仕方ないけどさ」

フニフニと無抵抗を貫く小猫の頬の感触を確かめながら、一実は呟くように言った。

「父さんと母さんから貰った体を、勝手に別のモンにしたくない。それに——」

悪魔の行使する転生は、特殊なチェスの駒を対象の實力に対応した個数消費して肉体を変質させ、魂までも一度呼び戻す。つまりは肉体を作り変えなければならぬ。

それは兄と並んで敬愛している両親から貰った体を捨てる事に他ならず、愛着ある弱小な体を捨てる事を一実は出来なかった。

そして、

「オレは、『化物』に成りたくない。絶対にな」

ピクリと、オカ研メンバーの視線が集中した。膝の小猫は振り向かないが、尋常ならざる嫌悪を含んだ言葉を間近で聞いて固まっていた。一誠も、何か言いたげな視線を一実に向けていた。

その言葉は、一実にとって偽り無い本心であり、絶対に譲りたくない一線。

そんな一実におカ研メンバーが向ける視線は複雑だった。

「……すみません。ですが、これだけはどうしても譲れません」

「まあ、あんな目に遭った後では、そうなるのも仕方ないわね」

リアスは一実の発言に理解を示すと、二度手を叩いて少し悪くなつた空気を変えた。この話題は一実にもオカ研メンバーにも良くない。「じゃあ次は、二人に神器を見せて貰いましょうか。二人共、出せるかしらっ？」

「俺は出せませよ」

「オレは出せません」

リアスの言葉に二人で手を挙げて答えた。

夕麻戦で一誠は何となくで出現させ、一実も出現させていたが、夕麻に対する憎悪で思考が真っ白になっていた一実は自身が発現して



いた事を覚えていない。

「この場合は魔力で満ちているわ。神器の発現も容易な筈よ。一実くん、目を閉じて想像しなさい。自分の知る『最も強い存在』を」  
言われるままに、一実は目を閉じた。

膝に座っていた小猫も、邪魔をしない様に立ち上がって少し離れた。

一実が知る中で一番強い存在。それは兄だった。

夕麻に襲われた時に、自分の前に立って立ち向かった兄の背中。その前も、ずっと前も守ってくれた背中。瞼の裏で鮮麗に再生される背中。それと同時に再生される、力尽きた兄の姿。

「望みなさい。力を」

あの時、もし自分が神器を発現させていたら、一誠は死ななかつたかも知れない。足手まといにならない力があつたら、一誠の力になれたかも知れない。

あのクソ人外をぶち殺せたかも知れない。

「……」

ズシリと、一実の両手に何かが握られた。

目を開けて両手重みを確認する。一実の手には黒い刀身の鉞と、同色の拳銃が握られていた。

一実が発現するのと合わせて、一誠も籠手を出現させた。

「……これは、当たりねえ」

赤い籠手を装着した一誠と、剣と銃を出現させた一実を見て、リアスが呟いた。

二人の宿していた神器は、どちらも非常にレアな物だ。特に一誠は別格だ。

当の一誠は自分の籠手の形状が変わっているように感じて頻りに首を傾げ、一実は鉞を逆手に持ちながら引き金に触れないように拳銃を確認している。

そんな二人を眺めて、リアスは笑顔を浮かべて宣言した。

「改めて、歓迎するわ。新たな眷属とお客人。これからよろしく頼むわね、イツセー、カズミ」

リアスの背中から蝙蝠の様な翼が現れるのを皮切りに、オカ研メン  
バーも次々と翼を現した。

そして、イツセーの背中からも翼が現れた。

一人だけ翼を持たない一実は、取り敢えず鷹のポーズを取った。

オカ研訪問から数日。兵藤家に少しの変化があった。日付がもうすぐ変わろうという頃、兵藤家の台所で一実が料理を作っていた。

鍋に味噌を溶かして、時折味噌をしつつ、並行してサバを焼いていく。

テキパキとした動きは慣れを感じさせ、使い終わった食器をさっさと洗うところに家事スキルの高さが垣間見える。

「一実、私はもう寝るわよ」

「んー、おやすみ母さん」

「一実もあんまり夜更かししない様にね。早く寝るのよ」

「あいさ」

「じゃあ、一誠にバイトしっかりやりなさいって帰ったら伝えといて」  
そう言うと、母は寝室へと向かっていった。

今、一実が作っているのは一誠の夜食だ。

現在、一誠はバイトと偽って悪魔の仕事に専念している。

オカ研訪問の一件から、一誠はオカ研の末席に加わる事となり、とある目標の為に全力でリアスから言い付けられた仕事をこなしている。

悪魔の仕事とは、基本的に契約をとって相応の対価を得るというものだ。

最近はずわざ儀式をしてまで悪魔を召喚しようとする者は少なくなり、今ではチラシに簡易魔方陣を載せて配り、欲深い人間と契約を結び願いを叶えている。悪魔の世界も甘くないのだ。

そして現在、一誠が励んでいるのはチラシ配りだ。

一度契約したら、何度でも繰り返す人間が多く、その人間の自宅にチラシを投函して常連にする。本来ならリアス達が使役する使い魔にさせる仕事だが、一誠のような新米悪魔には下積みとしてその仕事を経験させるのだ。

「……今日は兄貴遅いなあ」

もう日付が変わってしまった。体力が無駄にある一誠は、チラシを投函する仕事と相性が良く、規定よりかなり多くチラシを配り、尚且つ日付が変わる前には帰ってくる。

その事に対して小さな不安を抱いた。

それから三十分程して、玄関の扉が開かれた。

「ただいまあゝ」

気の抜けた一誠の声。

一実は冷めてしまった料理を電子レンジで温め直し、リビングに入ってきた一誠に労りの言葉を掛けた。

「お帰り兄貴、お疲れさん。飯作つといたから座っててくれよ」

「おう、悪いな一実。何か手伝うか？」

「いいよ、座ってて。今の内にオレに聞かせる今日の話を考えといてくれよ」

加熱終了のアラームが鳴ると、一実は手際良く取り出してテーブルに並べていく。

「おお、相変わらず旨そうだな。頂きます！」

「あたぼうよ。誰が作ってると思ってるんだ」

マグカップにコーヒを淹れて、一誠はの対面に座る一実。

一誠は食事に手を付けており、頬が膨れる程掻き込みながら美味しくに食べている。

「で、今日は何で遅くなったんだ？」

「ん？……んぐ、ん……と、それだけだな」

帰宅が遅い理由を尋ねられて、一誠は口の中の米と肉じやがを飲み下すと話し出した。

どうやら、チラシ配りが終わり、本格的に契約取りを任せられたらしい。

呼び出され、今日もチラシ配りかと思っいたらリアスに声を掛けられチラシ配りではなく契約を取り行く事を伝えられた。

依頼者の元に行くために、リアスから移動用の貰い、転移用の魔方陣を準備していた朱乃から準備完了が伝えられると、一誠は陣の中央

に立った。

陣が光を溢れさせると、次の瞬間一誠は依頼者の目の前に転移していた。

「すげえんだよ！ ホントに一瞬で転移したんだぜ！ もう魔力バンザイって感じだった！」

「うっわ羨ましい。あ、魔方陣どんな感じだった？」

「あー……えっと、一から九までの文字があったな。それと文字。周りのより大規模で、あと転移の間際幾つか数字が順々に光ったな。何かは忘れたけど」

「ほー」と少し思考した。先日、気になっていた魔方陣の事を一実は一アスに尋ねた。答えは一実が予想した通り、数秘術を原型とした悪魔独自の魔法であり、数秘術元来の『隠された真理の発見と未来予測』という力を作り変え、魔力の調整や魔法の行使をより円滑に行う事を目的にしていると伝えられた。

数秘術は本来は占術だ。数字を用いた未来予知や世界法則の解説を目的とされている。確かに占術なら、位置の特定や予測、調整などに適していると一実は納得した。

この転移の魔法は、恐らくより現代的な構成であり、転移を確実にするために数字で位置を特定して送り出すのだろう。

そこまで考えて一実は考察を終え、依頼の内容について話している一誠に耳を傾けた。

穏やかな兄弟だけの夜食はこの後一時間近く続けられた。



一誠の依頼内容を聞きながらの夕食も終わり、一実と一誠は食器を片付けていた。

「なあ、兄貴」

自分の使った食器を洗う一誠に、明日、正確には今日の朝に食べる朝食の準備をしている一実が声を掛けた。

「ん？ どした」

最後の食器を片付けて振り向く一誠。同じく朝食の準備を終えた一実が、両手に銃と剣を持って一誠に笑顔を向けていた。

「食後の運動に行かないか？」

深夜、時刻は深夜の一時を過ぎている。

そんな時間帯にも関わらず、兵藤家から少し離れた位置にある林に、一誠と一実の姿があつた。

二人共動き易いジャージ姿。軽く柔軟をしながら、一実は何やら道具らしき物を木や地面に突き刺していた。

「……なあー、一実い。ホントに大丈夫なのか？」

「安心しろつて兄貴。弟を信じろ」

黙々と作業をする一実に、一誠が不安そうな声を掛けた。それも当然の事だ。今から二人がやろうとしている事は、深夜にやろうとする事では決してない。住宅地から少し離れたこの林であつても不安は残る。

そんな一誠に一実は笑って答えた。自分を信じろと。

「うっし、準備終わりつと。兄貴、あそこからここまでなら大丈夫だぜ」

一実は二十メートル程離れた位置を指差すとそう言った。

その位置から一実がいる場所までは木が無く、ある程度開けた場所となっている。

「……信じるからな、一実」

「おう、じゃあ始めようぜ。模擬戦」

二人がやろうとしている事、それは模擬戦だ。

自宅で誘われた時、人に見られる危険を一誠は訴えて断ろうとしたが、口が回る一実に言い包められてしまって、結局近所の林でやる事になった。

一実から言われた模擬戦を行う理由は、自分と相手の神器を把握する事、朝に行くと人目が多く一誠も弱体化している事、深夜の全開一誠が自分の実力を理解する事、単純に戦闘に慣れて外敵から身を守る為、等と納得が出来、かつ利点が多かった。

そうしてホイホイと一誠は一実と模擬戦をする事になった。

「……」

二人は距離を取ると、互いに神器を展開した。

一誠の左腕に真つ赤なオーラを撒き散らしながら籠手が装着された。

夕麻と戦った時とは違い、掌が露出していた装甲が今は指先まで赤い装甲で覆っている。

変化した赤い龍の籠手。部活に初めて行ったあの日に、一誠はこの籠手の本当の名前をリアスから聞かされた。

『Boost!』

妙に聞き覚えのある音声を響かせ、赤いオーラが一誠の体を包み込んだ。

『赤龍帝の籠手』それが一誠の宿す神器の本当の名前。

見る者を圧倒する迫力を宿した籠手を纏う一誠に対峙する一実は、両手に銃と逆手に剣を握っている。そして、剣を握る右手の指先には、錠剤が摘まれていた。

それを口に放り込むと奥歯で噛み潰して嚥下した。

「いつでも良いぞ兄貴」

「あいよ……手加減はしないからな」

「当たり前だろ」と一実が言おうとした瞬間、一誠が動いた。地面を抉り取って加速して二人の間に存在した距離を一秒も掛からずゼロにした。

一瞬の内に懐へ入り込み、拳を握り締める。一実の鳩尾目掛けて繰り出された強烈な一撃、だがそれは下から現れた銀により弾かれた。

「……っ！」

咄嗟に距離を取る一誠。土埃を巻き上げながら一実に視線を向けた。

銃口を一誠に向けている一実は、一瞬前とは違う姿をしていた。両足と両腕に機械的な銀色の装甲を纏っている。

一実の拳動から目を逸らさないまま、一誠は一実に弾かれた右手をブラブラと振った。びりびりと痺れ、折れてはいないがかなりの痛みが走っている。

強化された自分にダメージを与える事から、一実の身体能力を強化

していると一誠は理解した。

「……うおつとー」

ガンツ、と銃口から弾が放たれた。悪魔の反射神経と身体能力で避けるが、一発で終わる筈がない。

何発もの弾丸が連射される。狙いは正確に一誠の急所を捉えており、悪魔である一誠でも命中したら危険極まりない。

強化された人外の身体能力と一誠元来の第六感により弾丸の連射を避けきった。

弾を撃ち切った一実がマガジンを地面に落としている間に一誠は一実に接近する。

『Boost!』

二度目の音声が響いた。『赤龍帝の籠手』の能力。それは『人間界の十秒ごとに力を二倍にする』という反則的な倍加能力。トゥワイス、クリティカル龍の手ロンギヌスの完全な上位互換に位置するたった一つの神器。それは極めれば神すら超える暴力。神滅具と呼ばれる世界に十三しか存在しない神器の一つ。それが『赤龍帝の籠手』だ。

更に倍加された力で加速する一誠。

弾丸の様に疾走する一誠を一実は視認していた。

「ワルド」

言葉を発すると同時に、一実の周囲に剣が顕現した。

刀身に薔薇の意匠が施された美しい五本のククリナイフ。それは回転しながら宙に浮遊している。

ヒュル、と風切り音をさせて、高速回転する五本のナイフが接近する一誠に襲い掛かった。

「うおつ、ぐつ……い！」

一本一本がまるで意思を持っているかの様に攻撃を繰り返す。多少の単調さはあるが、それでも二度の倍加を行った一誠がギリギリで捌き切る事しか出来ない。

『武装具現』アームズ・プロデュース一実が宿す神器の名だ。その能力は代償を払い武装の具現化すること。単純であり自由自在。対価に見合えば如何なる武装も具現化する。所有者が非常に少ない神器。



浮遊し自律して攻撃している『ワールド』もその一つ。自立攻撃能力を持って具現化した武装だ。

そして、

「吹っ飛ばせ、スランガ」

一実が握る黒いマチェットも、具現化した武装。

五本のワールドを相手に苦戦する一誠に向かってマチェットを振り下ろした。

剣筋は風の刃となって一誠に襲い掛かった。刃の風圧により周囲の枝葉が吹き飛び巻き上がりながら迫る。

ワールドに気を取られていた一誠が目前になってその存在に気が付き、咄嗟に左腕を盾にした。

ドボウツ、と風刃は一誠に命中すると同時に破裂し、一誠のいた場所には砂煙により見えなくなってしまった。

「はあ……ふう……やっぱ使い易いな、スランガとワールド……」

しみじみと手に持ったマチェットを眺めて呟く一実。

一般的な長さの黒いマチェット『スランガ』は風の能力を宿している。長さや重さも一実にとって丁度良く、手に馴染む。そして自立攻撃するワールド。戦闘は素人である自分の技量では対応する事が難しい敵を足止めする目的の武装だが、予想以上に性能が良かった。

だが、その分消費する代償も少なくなない。

代償として使っているのは一実の体力。一般人より格段に一実は体力があるが、それでも息を軽く整える程度には体力を消費していた。

「<sup>ブースト・アルム</sup>能力強化装甲もやっぱり重要だな」

肘まで覆う腕の装甲と脛を隠す程度の脚の装甲。夜の一誠にダメージを与える事が出来る頑丈性と身体能力の強化。人の域を出ない一実にとっては最重要と言えた。

出力調整が可能であり、まだ最大でない事を考えると、現時点で最も体力の消費が激しい事も納得できる。

「それと銃は——」

『Boost!』

銃の確認を一実がしようとした瞬間、強化の音声が轟き、砂埃が消し飛ばされた。

三度目の倍加。全身から赤いオーラを立ち昇らせた一誠が、粉碎されたワルドの残骸を足下に落として立っていた。

「わお、ワイルドな兄貴カッコいいー」

風圧と剣戟で服は汚れ破れている。だがまだ無傷で一実と対峙している。

一実の煽りに一誠はくきりと首を鳴らす事で応えた。

「まだ三十秒しか経ってないぞ一実。限界か？」

「ハツハ、ご冗談」

一実は新たに十本のワルドを具現化すると、スランガを構えた。次は接近戦だと暗に伝える一実に、一誠は笑顔で拳を構えた。

次の瞬間、音を越えかねない速度を出す一誠と、強化装甲の出力を最大にした一実の斬撃がぶつかり合った。

突風を巻き起こしながら、二人は笑い合って殴り合う。

模擬戦はこの後二時間近く続けられた。



「あーちくしょー。結局負けちゃった……」

「一実のは体力を消費して武器出すんだろ？　なら俺とは相性最悪だから気にすんなって」

「んな事言われたら余計気にするわ。あー……何か対策考えないと」

模擬戦を終えた帰り道。もう時刻は三時になってしまい、夜の街には人の気配は全くしない。そんな暗闇の中、等間隔に並んだ街灯を頼りに二人は歩いていった。

模擬戦は一誠の勝利に終わった。

三度目の倍加でワルドは一誠の一撃に耐えられなくなり、足止めの時間が短くなってしまい一実は息を整えて体力を回復する時間を稼ぐ事が困難となった。

銃での攻撃も倍加した身体能力と超感覚の前では無意味であり、全て弾かれ時間稼ぎにもならない。

その上一誠は十秒ごとに力が倍増する。それにも限界がある事が

戦っていて分かったが、長時間粘ったものの、結局一誠に押し切られてしまった。

「たったか帰って風呂入って寝ようぜ。今日は休みだしな」

「それもそーだな……」

幸い、今日は休みでありゆっくりと眠る事が出来る。

二人の身体は小さいな傷が複数刻まれ、運動着も薄汚れとほつれ、切られた痕とボロボロ状態だ。ついでに汗だくで非常に気持ち悪い。一刻も早く風呂に入って着替えて寝たいのが二人の素直な感想だ。

「あー……そいや兄貴。母さんが兄貴に『バイトがんば』って言ってたぜ」

思い出したように、一実が言った。バイトをしていると偽っている一誠への何気ない言葉だが、一誠は表情を少し暗くした。

「マジか……あーヤバイな。やっぱ罪悪感がヤバイ」

「基本父さんと母さんに嘘付かないもんなオレら。……なあ、兄貴は二人に話すつもりあるのか？」

一実たち兄弟は両親に絶大な恩を抱いている。

その両親に隠し事などした事など二人には数える程しか無かった。

でも、今回は事情が違う。過去、一実関係で人外や不思議な現象に理解があるが、それでも言い出す勇気が一誠には無く、そして一実も自分がその状況になっていたらと想像すると一誠に強く言い出せない。

「あるけどさ……やっぱもう少し先延ばしにしたいのが本音だな……。もしかしたら怖いのかな、二人に拒絶されるのが」

「あの二人に限ってそれは無いよ。オレの時だってそうだったろ？」

「頭では分かってるよ。でも、やっぱ怖いな」

自分は死んで、二人から貰った身体は悪魔の身体に変えられている。それに二人はどう思うだろう。それを考えると一誠は怖くて堪らなかった。

「んー……じゃあ、兄貴はさ」

表情を暗くする一誠に、一実は声を掛けた。

煤けたように土で汚れた顔に一誠に似た明るい笑顔を浮かべて。

「オレがさ、もし悪魔になってたらどうしてた？　突き放して拒絶したか？」

「そんな事する訳……………あ……………」

「つまりはそうだろう？　二人だつてそうだと思うぜ。オレ等の両親なんだからさ」

詰まるところ、その結論に行き着く。

一誠の立場に立って考えると確かに言い出すのは怖くて仕方ないだろう。両親がその手の知識を持っていると特に。

だが、一実には確信がある。あの二人は決して自分の子供を見捨てる人間ではないと。受け入れてくれると。何故ならこの兄を育てた二人なのだから。

「気持ちの整理がいたら……………話そうぜ？」

「……………ああ、そうだ——っ！」

突然、一誠が右手で一実を止めて、神器を展開した。

いきなりの行動に一実は驚いて一誠の顔を見た。

夜目の利く悪魔の目で、少し離れた街灯を睨み付けている。

一実も街灯を見ると、さつきまで話していて聞こえなかった音も聞こえてくる。

遠くから聞こえる車の走る音。虫の鳴き声。風の音。自分達の先に満ちている暗闇から近付いてくる、硬いブーツがコンクリートを歩く音。そして、

「ん〜？　いけませんねえ、こんな真夜中に出歩くななんてえ。不審者に襲われても文句言えませよん？　まあ、オレちんがその不審者なんだけどねえ」

街灯の光に照らされて、白い髪と神父服が浮かび上がった。

lif a. 7 白髪のエクソシスト

——ねえ、貴方。仕事を引き受けてみないかしら？

黒い翼を広げた女は、白髪の男にそう声を掛けた。

——お仕事ですかあ？ 俺っち楽しくないとボイコットする主義ですよ。

——なら良かったわ。きっと貴方も気に入るわ。最初は退屈かもしれないけど、すぐにとつても楽しくなるわよ。

訝しむ男に、女は笑って答えた。

墮天使が、よりもよって自分に話し掛けること自体が、凄まじく怪しい事を女は果たして理解しているのだろうか。そう思える程、女の笑顔は美しく、そして楽しげだった。

だからだろうか、男はこの仕事を受けてみようと思った。

退屈で、退屈で、仕方なかった。そんな時に、面白そうな仕事がり込んで来たのは運命にも思える。

そしてそれは正しく運命だった。

——あゝ、イイツすねえ。

凶暴な笑顔を浮かべた男は、二つ返事で承諾した。

つまらなかつたら殺すだけだと思いながら、墮天使を見上げて笑う。

やっと退屈から解放されそうだと心を踊らせて。



「未成年の深夜徘徊は危ないですよ。それもクソ悪魔なんかと一緒に

だと、俺つちのように仕事熱心な社畜の鑑みたいエクスシストな悪魔祓いにブチ殺ころされるでござんすよ。いや〜世の中世知辛いねえ」

悪意の籠った赤い瞳を爛々と輝かせ、口元に笑みを浮かび上げさせながら、一実たちを眺めている。

「悪魔祓い……」

エクソシスト。悪魔を滅ぼす教会の戦士。教会に属して退魔の力を天使から授かり、邪悪を祓う事を使命とする者達の総称。悪魔の天敵。

一実と一誠が視線を向けた先で嗤う男もその一人。

改造された神父服と下卑た表情を浮かべている男が悪魔を祓うエクソシストだとはとても思えない。

そう一実が思っている内に、白髪のエクソシストは右手を前に突き出した。

白銀と金の装飾が施された流麗な拳銃が握られ、銃口は一誠に向けられている。

『「邪魔者と悪魔はぶつ殺オツケー」って、俺つちのボスから言われているんでね。さてはてクソ悪魔とアホ毛の坊っちゃん。俺の名はフリード・セルゼン。とある御方の下で働く雇われエクソシストでござえます」

「……これはどうもご丁寧——にいいいつつ!!」

話しかけようとした一実に光の弾丸が音も無く放たれた。

自己紹介をしたのなら、ある程度対話が可能なのではないかという一実の希望を嘲笑うかのような弾丸を、首を曲げて頬を削られながらもギリギリで避けた。

「俺つちが名乗ったからって反応すんなよ。クソ悪魔の名前を覚えるのタルいし、あ、でもアホ毛な坊っちゃんも言っても良いぜ、三十秒で忘れっけど」

「話し掛けたのオレだよ……。なーんで最近是对話が不可能なお相手が多いんだかねえ……」

カズミン泣けてきた、と血を流す頬を指で撫でて確認しながらため息と一緒に呟く一実。そもそも銃を向けている相手に話しかけるこ

と自体が無謀だという事実からは目を背けた。

何処かの組織に属しているのなら、対話を通して穏便に済ませる必要性を説く事も可能だ。自分にとって不都合な事態に陥る事を望む者は少ない。

だが、視線の先で銃口を向けているエクソシスト——フリードは恐らく対話が出来ない人種だ。そうでなければ話しをしようとしている相手にいきなり発砲なんて基本的にしない。

「一実っ！ テメエよくも——」

「兄貴ストップ」

一実が負傷した事に激昂した一誠が、自身をブーストしようとした瞬間、一実が制止の声を掛けた。

「何でだよ一実っ！」

「冷静に考えろ兄貴。どう考えてもヤル気満々なエクソシストさんだけど、下手にぶん殴ったら組織の問題になる。それに兄貴の神器だと被害がデカイ。街中で使ったら人に見られるっ。ここはリアス先輩を連れて来て、判断を仰ご——ッ！」

「無視するのはイヤイヤよ」

早口で一誠に理由と今からの動きを伝える一実へ、再度凶弾が放たれた。

一実の口元を狙って迫る光弾を、海老反りの様に後ろへ振り返って避けた。

グン、と一実が上半身を起こすと同時に、黒いブーツが目前に迫っているのが目に飛び込んだ。

「っッ!!」

「おっほ、マジかー！」

腕を交差させて顔面に放たれた蹴りを受け止めた。

体重を移動させて衝撃を逃がしても、両腕で受け止めた衝撃の強さに倒れそうになる。

人間の放った蹴りだとは到底思えない程の威力が込められた一撃だった。

そんな蹴りを受け止めきれれるとは思っていなかったのか、驚愕と狂

喜の表情をフリードは浮かべていた。

一実は掌に銃を具現化すると、ミシミシと今だに力が入れられている脚を受け流した。

武術を嗜んでいる訳ではない、拙い受け流し。だが、片手を自由にするにはそれで十分だった。

銃を握る腕を挙げて、引き金を引く。突飛な行動にフリードも距離を取った。

パシユツと微かな音を立てて銃口からの放たれたソレは、円を描くように広がり、三人を取り囲むように大きな円を作った。

「行け兄貴！ 早く先輩に伝えてくれっ！」

一実が叫んだ。銃口をフリードに向けて牽制しながら、背後の一誠に。

一誠は唇を噛み締めた。

相手は突然襲い掛かってくる訳の分からないエクソシスト。しかも悪魔である一誠ですら、一実へ蹴りを放つ姿が捉えきれない程の手練。

対する一実は最近神器を発動した戦闘初心者だ。置いて行くなど殺すも同然だ。

一誠が加わった場合高確率で倒す事は可能だが、一実が言う通り一誠の神器は破壊力が高過ぎてこの場で使用するにはリスクが高い事を、一誠も理解していた。

不甲斐ない兄だ。弟を危険に晒す選択を取ることしか出来ない自分に嫌気が差してしまう。

「……っ！ 分かった！ 絶対怪我すんなよ一実！」

「おうとも！ ついでに小猫ちゃんを連れてきてくれたら超嬉しい」「任せろ！」

『Boost!』

この場でエクソシストを殺さず、被害を最小にするのは多彩な能力を扱える一実が適任だ。なら、信じよう。自慢の弟を。自分は、一刻も早く先輩に伝えて助けを求めなければならない。

身体能力を倍加した一誠は、振り向くと同時に悪魔の翼を広げた。



「おろろ、クソ悪魔タン逃げちやいや〜ん」

「アンタはこつち見やがれっ！」

背中を向けた一誠に向かってフリードが光弾を放つが、一実が具現化した浮遊し高速回転するワルドによって光弾は弾き飛ばされた。

そうしている内に、倍加した跳躍力で飛蝗のように跳ねた一誠は、遙か上空で広げた翼を使い、凄まじい速度で消えて行った。

「兄貴飛べたんだ……」

意外そうに一誠の消えて行った空を横目に、呟いた。てつきり全力疾走でもするのだと思っていた。兄にはそつちの方が似合っているし、と軽く現実逃避しながら、目の前で一誠より余程悪魔らしく嗤うエクソシストと向き合う。

正直な話、一誠に話した内容はこじ付けに近かった。

一誠の神器が及ぼす被害を考慮したのも、組織の問題に発展しかねないと言ったのも、一誠とエクソシストを戦わせたくなかったからだ。

悪魔にとって光は猛毒である。特に天使や墮天使が扱う光はかすり傷でも致命傷になってしまう事すらある。

そして、その天使達の尖兵たるエクソシストはその光を分け与えられ悪魔を滅する。

そんな存在と、まだ生まれ変わって日の浅い兄と戦わせたくはなかった。

「んーんー。うれしいな。久しぶりにうれしいぞ。俺っち今めっちゃハッピー。面白おい玩具が見つかったからね。なあ、カズミちゃん」

「……一応言っとくけど、オレ等の後ろには悪魔の貴族が着いてるぞ。回れ右して穩便に済ませないか？」

周囲にワルドを複数具現化し滞空させ、掌に錠剤を具現化して口に放り込みながら、楽しくて仕方ないといった様子のフリードに問い掛ける。

返ってくるだろう答えは分かりきっている。会話らしい会話を一切していないながらも、一実はフリードという人物を理解し始めていた。

「知らねえよ☆」

「だすよねー」

具現化したスランガを握り締めて一実は地面を蹴り出した。

届くかどうか分からない。勝てる気は全くしない。逃げる訳にも  
いかない。足止めして、兄達の到着を待つしかない。

スランガを構え、無数のワルドを引き連れた一実に、フリードは変  
わらず歪んだ笑みを浮かべたまま、銃を構えた。

「おおおおおおお！」

「良いねえ！ おにいさんが遊んだげるよ」

地面を蹴り出し、走り出す一実。その身に闘志を纏って迫る一実  
に、フリードは興奮気味に腕を振りかぶった。

白銀の銃身と黒い刀身がぶつかり合った。



戦いの勝敗を決めるのは何だろう。

力の強さ？ 技の完成度？ 能力の効果？ 才能？ その時不  
思議な事が起こった？

議な事が起こった？

違う。断じて違う。どんなに圧倒的な力があっても、どんなに見事  
な技を持っていても、如何に反則的な能力が備わっていても、天賦の  
才を与えられていても、それがなければ始まらない。それがなければ  
意味を成さない。

場数と経験。

兵藤一実には、それが足りない。

『武装具現』アームズ・プロデュースという汎用性に優れる優秀な神器を持つていようと  
もその法則は揺るがない。

ヒュン、と風を切り裂いてフリードへと迫る無数のククリナイフ。  
自律し複雑な軌道を描く刃の軍勢。

だが、一本たりともフリードを傷付けることは無い。

「ヒハハハハハ、カーズミーん、こんなん当たんねーよ。頑張れ頑張れ」

「ちっ……くしょうっ。どんな反射神経してやがんだ！」

光弾で、銃身で、時には手帳で、迫るワルドを正確無比に弾き撃ち落とす。

距離を取っている一実が具現化した銃での射撃も、素早い身のこなしで回避されている。その上手拍子で一実をおちよくる余裕に、実力の開きが否が応でも理解させられる。

強い。少なくとも、兄以上の実力は確実に持っている。白目を剥きたくなる現実だが、泣き言を内心で抱く余裕も与えてくれない。

「ほらほら、今度はおにいたんから行くよー」

「っっ!!」

まわり付きワルドを蹴散らし、本来なら視認不可能な速さで一実を肉薄にする。

次いで放たれた分厚い手帳による打撃を、体を逸らして回避する。

眼前を高速で通過した手帳の速度に内心チビリそうになりながら、右手のスランガを振った。

ブン、と風の力で加速した斬撃がフリードの首を切り裂かんと放たれる。

「うっは見えっ見え」

語尾に草でも生やしそうな、笑いが堪えきれないセリフを零して、フリードはスランガの一撃を悠々と回避した。

巫山戯た物言いだ、実力は本物。戦闘初心者である一実の攻撃など息を吸う様に見切っている。

「ぐおっっー」

そして避けながら放たれたフリードの鉄脚は、一実の顔を確実に捉えた。

世界がグチャグチャに捏ね回されたかのような衝撃が頭を貫き、意識が吹き飛びそうになる。

——慣れている。

揺れる視界で強引に銃口をフリードに向けて引き金を引く。

ほとんど密着した状態にも限らず流れるような身の動きで一実から離れるフリード。

ステップするような動きから、その少しの本気も出していないことが見て取れる。

戦う事自体に、フリードは慣れている。一実が取る行動の一步先を読んでいるがために、確実に回避し挑発している。

遊ばれているという事実に、少し心がポツキリと折れそうになる。

「……はあっ……はあっ……」

「あららカズミンもう限界？ 体力無すぎじゃないかな。体力不足は命に関わりますですよ！」

「今がその時ですね分かりたくないです……っ」

既に一実は一誠との模擬戦でかなりの体力を消費している。その上でワルドを一誠との模擬戦以上に具現化しており、その上でスランガと錠薬、そして、今現在も二人を囲む黒い剣——『サイレンス』と名付けられた武器を具現化している。

模擬戦で使った『能力強化装甲』<sup>ブースト・アルム</sup>よりも燃費は良い武装しか具現化しておらず、『サイレンス』も名の通り武器で囲んだ範囲から一切の音を漏らさず姿も視認されないと言う能力しかないため消費は少ないが、しかし具現化した武装の数が現時点で一誠との模擬戦よりも多かった。

一実の体力は既に限界間近まで迫っている。

足止めを始めてから二十分近くの時間が経っている。実力も天地ほどの差が開いている事は一目瞭然であり、フリードもまだまだ手札を残しているように思える。エクソシストの武器が銃だけだとはどうしても思えなかった。

「……すう……はあ……」

勝機はない。

ならば死力を尽くして、助けを信じる他ない。

残り少ない体力を絞り出して、最後の具現化を行う。

「そろそろおにいたん飽きたから……穴だらけにしてその街灯に吊るしてやんよ！ めっちゃお洒んティーにしてやんから安心しな

！」

「出来るかタコ」

言葉と同時に、奥歯の上に具現化したそれを噛み砕いた。

バキリ、と離れたフリードにも聞こえる音を響かせ砕かれたそれを、一実は躊躇なく飲み下した。

——瞬間、一実の口から黄金色の呼気が吐き出された。

「……カズミンなにしたん？ 息臭そうよ」

はああ、と煌めく吐息を出す一実の体に、更なる変化が生まれた。

鳶色の瞳が紅く染まり、白目が充血する。体からも蒸気のように黄金のオーラが噴き出している。

一瞬前までの満身創痍から一転、黄金を纏って睨み付ける一実に、フリードは初めて悪寒を感じた。

「かああアアアっ！」

「ヒエエエええッ」

具現化には条件がある。

多彩な能力と武装が最大の強みであるが、能力の性能が高ければ高い程により多くの代償を必要とする。絶対的な能力を付与する事も可能だが、それには相応の代償が不可欠。これがこの神器最大の欠点。

だが、代償を下げる方法も存在する。

能力に短所を意図的に残すことだ。目的の能力を発動する弊害を更に付与する事で長所を相殺し、欠陥武装として具現化する。具現化の代償は欠陥により下げられて現実に現れる。

一実の行った具現化はそれだった。

自身の体を限界まで強化する。体力がまだまだ残っていたなら、デメリットを全て除いて具現化することも可能であったはずだ。しかし今はそんな余裕は存在していない。

体に掛かる負担を全て残したまま具現化した錠剤型の武装『限定強化薬』リミッター・リムーバル。本来ならネタでこんな格好良いなと思っていただけの武装薬剤を一実は使った。

金色のオーラと深紅の瞳が紅い線を引いてフリードへ迫る。その

速さは三度の倍加をした一誠より尚速い。

瞬きをするより速く、フリードの眼前に到達した一実は、スランガを横薙に斬り放った。限界強化された一撃は一実が放った中で最大の威力を誇っている。

だが、そんな一撃を許す程、フリードは甘くない。

横薙が当たる直前に下から蹴り上げ、腕自体を弾き飛ばす。限界強化された一撃にも関わらず、フリードの尋常ならざる脚力により、渾身の一撃は防がれた。

間髪入れずに放たれる光弾。本来なら避けるべき弾丸を、一実は、

——手の甲で叩き落とした。

「うっそんなマジかいカズミンっ！」

「割といてえよこんちきししょうっ!!」

予想外の防御に流石のフリードも驚愕した。

一実は泣き言を漏らしながら、お返しとばかりに銃身を握る左手を振り上げて、フリードの白銀の銃に向かって叩き付けた。残弾尽きた銃は、最早打撃武器でしかない。

ガンツ、とフリードの手から銃を弾き出すのと同時に、一実の銃が耐久力の限界で光の粒子へと変わった。

だが、フリードの手から、銃はなくなった。

「そっ……おとおお」

「ひよああああ」

スランガを両手で握った一実の猛烈な連撃。フリードから見れば荒削りでまだまだ拙い攻撃だ。だが、それが限界強化されていたのなら別だ。一発でも喰らったらフリードの身体など布のように切断されてしまう。

上段の一撃はスルリと避け、確実に胴を狙った一撃は素手で弾き受け流す。

身体能力でフリードより勝った一実に、防戦一方を余儀なくされる。

「う……ぐうっ」

「お、ギブかなカズミン。いいのよギブしても。人間諦め肝心」

だが、実際追い詰められているのは一実だ。

元々体力の尽きかけた体を、薬剤によつて無理矢理動かしている現状、一実の身体に掛かる負担は計り知れない。

このままでは、フリードに一撃を入れて戦闘不能にするより先に、一実の肉体が限界を迎える。

スルスルスリと回避を行うフリードにスランガを振りながら、決めとなる一撃を、一実は使った。

「吹っ飛ばせ!!」

「おおう!? ゲパアツ!!」

フリードに一切見せなかつたスランガの風の斬撃。

広く吹き飛ばす風の波に不意を突かれたフリードは、直撃を喰らつて吹き飛んだ。

飛ばされていくフリードを逃さず追従する一実。

『サイレンス』のギリギリに背中から転がるフリードにスランガを振り上げ、渾身の力を込めて叩き付けた。

——パキンッ、

と一実の背後で、金属が地面に落ちる音がした。

lif a. 8 聖書の子と悪い予感

「……あー……ちくしょう……」

背後で響いた金属音と、頬を伝う痛みと熱を感じて、思わず悪態が口から吐かれた。

全身に鉛を括り付けられているような疲労と激痛を感じる。膝から力が抜け、硬い道路に崩れ落ちた。強く打ったにも関わらず、痛みは少しも感じない。

「おーすげすげ。コレに切れ込み入れちゃうなんて、切れ味鋭いつすねーそのマチエツト」

膝立ちで動けないままの一実の下からスルリと抜け出して立ち上がるフリード。嗤いながら、分厚い手帳をゆらゆらと見せ付けるように揺らした。

黒い革で表面を覆われた、高価そうな年季を感じさせる手帳。威厳すら漂いそうな風格を纏ったそれは、スランガの一撃によって斜めに大きく切れ込みが刻まれていた。

「……一体、何で造られてんだよ……その手帳……」

スランガの切れ味は鋭い。一実が初めて本格的に具現化した時、自宅の物置から持ってきた金属の棒を数本まとめて容易く切断する程度には。

スランガ自体がそれ程であり、加えて先の一撃には『リミッター・リムーバル限定強化薬』で強化されたもの。漫画やアニメのように巨大な岩を切断する事すら可能な一撃を、分厚いとはいえ紙と革で出来た手帳が受け止めるのは、驚愕より先に呆れと絶望を感じる。

「俺っただけの特別なものだよ。俺っち以外の禁欲エクソシストは持ってないから安心してな。まあ、俺っちに可愛くデコられるカズミンには関係ないか」

つまりは目の前にいるキチガイは普通じゃないってことっすか。初戦は低ランクに行こうよ。ニューゲームしてマゾい難易度を選ぶ人間と違うよオレ。最近何でこうトラブルが多いんだよちくしょう。脳内で数々の悪態を吐き出す。満足に動けない一実が出来る、数少な



い抵抗だった。

——パラ

紙が捲られる音が耳に届き、一実 は俯かせていた顔を上げた。「折角だから、カズミンに残念賞を授与してあげちゃいます。強制だから拒否権はモチないよ」

パラパラと、手帳のページが勝手に捲れる。フリードは手帳に手を添えているだけだが、その姿は奇妙なほど様になっていた。

ぞくり、と背筋に冷たい感覚が昇った。

「悪しき者の謀略に歩まず、罪人の道に立たず」

フリードの口から紡がれた一節。巫山戯た口調から一転して、別人のようにすら感じる程、穏やかで麗しい声だった。

「嘲る者の座にすわらぬ者は幸いなり」

ページに目を向けることなく、一実を見据えて読み上げられた一節。フリードの足下に白い法陣が現れ、そこから吹き上がる風でフリードの白い髪が揺れた。アルビノであり容姿が非常に整っているフリードの姿は、神聖さと荘厳さを伴い、まるで自分が聖堂に居るような錯覚すら覚えた。

フリードが読み上げる言葉は一実の記憶が正しければ、確か聖書の一節だ。

——ああ、これはヤバい

たった一節。それだけしか唱えてないにも関わらず、異常な程の威圧感、焦燥感、危機感が体を駆け巡る。

脳内でけたたましくアラームが鳴り響くような感覚がしているが、無情にも体は軽く動くだけで逃げようにも逃げられない。

「【このような人は主の律法を悦び】」

二節目。一実を中心に輝く法陣が現れた。悪魔であれば消滅してもおかしくない程の聖なる光が夜闇を引き裂いた。

人である一実でさえも、その光が宿す神聖さを理解できた。同時に、詠唱している神父がどれ程圧倒的な存在なのかも、理解してしまった。

終わりが目の前まで来ている。だが、一実はまだ諦めてはいなかった。

た。

何故なら――

――そろそろ兄がマイスイートデビルを連れて来てくれるから。

虚空に突如展開された紅の魔方陣から、白い髪を靡かせて小さな影が飛び出した。

弾丸のような速さで一実の頭上を飛び越し、フリードを射程圏内に入れた瞬間、鋭く疾い蹴りを繰り出した。

「昼も夜もその」――おおっと!? ぶねっ!」

人間を容易く絶命させる脚撃を、紙一重で回避するフリード。武術を嗜む人間でも視認困難な攻撃をあつさりと避けるあたり流石と言える。だが、詠唱は中断され、不発に終わった。

空中で蹴りを放った勢いを利用して体を捻り更に追加の蹴りが放たれた。

回避が間に合わずフリードは腕を滑り込ませながら蹴りを受け止めようとして、一実が放った渾身一撃とは比較にならない程の衝撃に吹き飛ばされた。

頭上を吹き飛んでいくフリードに、短時間に頭上を二回も何かが飛んで行くと珍しいな、と疲労で混濁した頭の片隅で思いながら、腰から一瞬だけ生やした翼を羽ばたかせて一実の前に降り立った影を見た。

飛ばされて行ったフリードを見据えながら一実の前に立つその小さな体は、消えていく法陣の光に照らされ、一実の目には何よりも美しく幻想的に写った。

「無事ですか。一実くん」

「ああ……こりゃ即落ちするわ……」

主人公に守られて即落ちするチョコロインの心境が分かった気がする。小さな背丈に駒王学園の制服を着て、フリードと似た白い髪が揺らめかせる少女。塔城小猫が一実を救出するために現れた。それだけで、胸が一杯になる。そして好感度が滝を昇る龍のように上昇している。

半身でフリードを警戒しながら、横目で一実を見る。小猫の金色の

瞳と視線が合った。琥珀が嵌め込まれたような美しい瞳に、一実のテンションは鰻登りだ。

「無事……みたいですね」

「イエスイエス。ちよつと無理したけど全然元気だよオレ。小猫ちゃんに逢えただけで元気百倍。今なら惑星砕けるよ」

アホ毛をブンブンと喜ぶ犬のように振りながらハートを撒き散らすいつも通りの一実に、呆れたような視線を向けながらも小猫の目元は安堵で少し緩んでいた。

「一実つ、無事か!! 無事ならおっぱいって叫べ!」

「ちっばい」

「良かった無事か!」

小猫が現れた魔方陣より二周り以上の巨大な魔方陣が地面に現れると同時に、一誠のアホな叫びが放たれた。

一誠に続いてリアス、朱乃、祐斗が魔方陣から姿を現した。何故かリアスは非常に険しい表情を作っていた。

無事な様子の一実に駆け寄る一誠を横目に見て、一度安堵の溜息を吐くと、リアスは蹴られて倒れたフリをしているフリードへ鋭い視線を送った。

「こんばんわ。静かな夜ね。素敵な夜なのに、貴方のお陰で台無しよ。ねえ、『聖書の子』冒読者フリード・セルゼン」

「おんやあ? 俺っちの噂ってそっちにまで届いてんの? いやあ、人気者は辛いね。プライバシーなんてあったもんじゃない」

「届くに決まってるじゃない。悪魔にとつて、貴方は危険過ぎる。……そんなのが何故私の管理地帯に入り込んでるのかが問題なのだけどね」

何事も無かったかのようにスクリと立ち上がるフリード。だが、その姿は明らかに無事ではなかった。

小猫の蹴りを受け止めた腕はくの字に折れ、血が滴っている。普通なら痛みで悲鳴を上げて然るべき傷を負っていながらも、フリードは平然としていた。

そして、折れた腕を見下ろすと、「あーやつちまってんなー」と呑気

な声を出した。

あまりにも異常だった。悪魔ならまだしも、フリードは人間。その光景に、一実は目を見開き、一誠は顔をしかめた。

「教会から追放された貴方が何故この街に居るのかしら？ それも、使い魔の目を掻い潜って……。誰の手引きで入り込んだか、答えてちょうだい」

「俺っちが悪魔畜生にそんなこと教えると思ってるの？ 頭悪いの？ 栄養がお胸に行っちゃってんの？ ファツキンデビル。いやデブル」

問い掛けるリアスに、フリードは笑顔で罵倒を返した。答える気は微塵もないようだ。

リアスは額を押さえて溜め息を吐いた。少し自分の手に余りそうな事案が発生するような予感を感じて。

後に一誠語る。疲れた表情の美女ってエロい、と。

「なら、今ここで捕らえさせて貰うわ」

額を押さえていた手で髪を掻き上げると同時に、リアスからドス黒い魔力が噴き上がった。

一誠と小猫も、一実を庇うようにしながら臨戦態勢になり、祐斗もいつの間にか鞘付きの西洋剣を持ち、朱乃は両腕に電気を迸らせている。

「おーおーやる気満々つすねえ。遊んでも良いつすけど、俺っち分が悪い遊びは好かないのですん」

一触即発、そんな雰囲気醸し出すリアス達を見渡して、何かを察するとフリードは呟くと、折れていない手で手帳をバサリと広げた。「だから、一時撤退させて頂きやす」

言うと同時に、手帳から無数の紙片が吐き出された。

「っ！ 皆離れなさいー！」

リアスの声に、全員が即座にその場を離れた。一実は小猫にお姫様抱っこされて難を逃れた。

「神よ、願わくは私をお救い下さい。主よ速やかに私をお助け下さい」

響き渡る神聖なる一節。それを詠うのは聖書の子といわれた男。

聖書は悪魔にとつては光と並んで毒物だ。その一節を聞くと激しい頭痛に襲われる。ましてやフリード程の人物が詠む一節など、凄まじい苦痛となつて襲い掛かる。

「うぐああああつ」

「あ、兄貴?!」

頭を押さえて、一誠が踞つた。初めて感じる呪いのような苦痛と嫌悪感に一誠は耐え切れなかった。

「安心しなさいカズミ。死にはしないわ」

ギリギリね、と一実を安心させるように言われたリアスの言葉。

当のリアスも、苦痛に美貌を歪めている。いや、リアスだけでなく、オカ研メンバー全員が苦痛に顔を歪めていた。

「それでは皆様、また来週お会いしましょう！ んじゃバイバイキーン」

フリードを中心に紙片が竜巻のように渦巻き、空へと伸びる。それは、天上の神に助けを求める手のように、上へ上へと伸びていった。

そして、長さが三十メートル程度に到達した瞬間、中心のフリードへ紙片が殺到した。

滝のように降り注ぎ、離れた一実にも衝撃を感じた。

「……紙片の盾……いや壁ね。上級悪魔でも触ったら消滅しそうね……」

リアスが呟くのと同時に、風が止まった。

フリードが立っていた場所にはヒラヒラと一枚の紙が残っているだけで、フリードは消えていた。

逃げられたのだ。

「はああー……助かったわ……」

「部長、良かったんですか？ 逃がしてしまつて」

疲れたように息を吐き出したリアスに、祐斗が問い掛けた。

「戦うつもりは無かつたわよ」

「へ？」

リアスの答えに、一誠が困惑の声を上げた。先程まで戦意を滾らせ

ていたのにも関わらず、戦うつもりが無かったという言葉は、頭の悪い一誠では理解不能だった。小猫と祐斗も、同じ様に困惑の表情を浮かべている。

ハテナマークを浮かべる脳筋達に、リアスは苦笑を浮かべた。理解している朱乃はいつも通りの笑顔をしていた。

「彼は悪魔に対して無類の強さを発揮する、悪魔殺しの完成形と呼ばれる男よ。その強さは上級悪魔をも容易く屠るわ。そんなのと正面からやり合うなんて阿呆のする事よ。だから引いて貰えるように威嚇しただけ」

そう言う。「今から仕事が増えるわねえ……」とぼやいて、リアスは髪を掻き上げた。あんな悪魔絶対殺すマンが管理地帯に侵入していること事態が大問題だ。すぐにでも問題の究明に当たらなければいけない。この地域には魔王の関係者や悪魔、その契約者が多数いるのだから尚更手早く事に当たらなければならない。

デスマーチの予感にげんがりしているリアス。一誠達への説明は十分だと思っていたが、本人はそうではなかった。

「えっ、ちょ、待って下さい！もしアイツが襲い掛かって来てたら、どうするつもりだったんですか？」

ここは住宅街。一実が一誠を送る時に言ったように、威力の高い攻撃は制限される。一誠はまだリアス達の実力を見た事がないが、肌で感じる力は自分とは天地の差がある。放つ攻撃も桁違いだろう。だがそれも住宅街では下げる他ない。そして相手は戦闘を回避しなければならぬ程の相手。

もしフリードが被害を一切気にせず向かって来ていたらどうしたのか。一誠が聞きたい所はそこだった。

「言い忘れてたわ……。戦闘になりそうなら、転移魔法で遠くに飛ばす事になっていたのよ。ごめんなさい、急ぎだったから貴方達に伝えていなかったわ」

予め伝えられていた朱乃のが手の平の上に数字の敷き詰められた魔方陣を形成して一誠達に見せた。

一誠にフリード・セルゼンと名乗るエクソシストに襲われたと伝え

られたその時に考え、朱乃に伝えたが、転移魔方陣の設定や認識阻害の魔法の行使と一実の救出と急を要しており一誠達に伝える機会を逃してしまっていたのだ。

「ああ……やつと合点がいきました。すみません、理解力が無くて……」

「いいのよ。急いで連絡を怠った私に非があるわ」

漸く納得して頭を下げる一誠の頭を撫でて、リアスは自分に責任があると言った。

小猫と祐斗も納得したようだ。

「さて、急がせた原因くんはどうしてるのかしら？」

勿論一実の事だ。実戦経験がほぼ皆無にも限らず、教会の悪魔滅殺機を正面から相手取る無謀を犯した真正正銘の阿呆。

そんな脳足りんの様子を確認しようと、リアスは小猫の腕の中に視線を向けた。

未だに小猫に横抱きにされている彼は、小猫の頭に鼻を押し付けて目を瞑っていた。

「……寝てます」

無表情に一実の状態を告げる小猫。

一実は寝ていながらもクンカクンカと鼻息を荒げている。至って平常運転だった。

「……はあ」

呆れと安堵を重ねた溜め息を誰かが吐き出した。無事ていてくれて良かったと。

溜め息を最後に、静かな夜闇が息を吹き返した。

まだ夜が明けるには少し時間がある。夜の穏やかな空気を感じながら、リアスは空を見上げた。

月と星が夜空を彩り、悪魔の身体に夜の魔力で満たしてくれる。

「さあ、そろそろ戻りましょう」

何かが動き出しているのを感じながら、リアスはゆっくりと歩き出した。

l i f e . 9 王様のお仕事

「……リアス先輩、これ……何時まで続けるんですかね？」

一実が無茶をしてから三日経った。

もう夕暮れを過ぎて夜と言つていい時間のオカ研の部室。豪華なインテリアの並び、蝋燭の静かな光が照らす室内の中心に、場違いなインテリアとして一実は四つん這いで拘束されていた。

一実のほぼ正面にあるソファに深く腰掛けるリアスは、幾つか書類の束を手に、隣に待る朱乃に目配せをした。目元に濃く隈を浮かばせた姿は、何処か退廃的な美を宿している。

「あら、まだ話せる余裕があるのね。朱乃、重りの追加よ」

「承知しましたわ」

「ちよ、おぐうううっ」

さて、一方の一実は両手と足首に魔方陣が展開され簡易的に拘束されながら、背に大量の重りを持った小猫を乗せた無様の極みを晒している。

そこへ、更に朱乃が追加で何処からともなく取り出したコンクリートブロックが小猫に持たされる。

普通なら背骨が折れる重量だが、鍛えられている一実の体は潰れて解放されることも許さない。

「ぶ、部長。流石にもう不味いんじゃない……」

「そうかしら？」

足下で正座している一誠の弟の身を案じる言葉を聞いて、書類から視線を外した。

一実が折檻され、一誠が正座させられているのは勿論フリードと邂逅した夜の事件が原因だ。

神器の模擬戦を対策をしていたとはいえ勝手に乗ってしまった一誠にルゼンに対して無謀な戦闘を挑む。

大体の原因は一実だ。そして深く考えずに乗ってしまった一誠にも責任がある。

またこんなことをしないように、体へ躡ける必要がある。



必要があるのだが。

「あ……重つ、ああ、でも、尻が……臀部が、柔らかくて……ふ、ふお  
おとおおつ……両手が使えないからより背中感覚が……ああ、兄  
貴つ、目隠しをくれ！」

「お前は一体何を言っているんだ」

「……」

「……ねえ、イツセー。貴方から見て、カズミはどう見えるかしら？」

「……めっちゃ悦んでますね」

単なるご褒美にしかなくていい。

幾ら小猫が軽くとも、両手にコンクリートブロックで軽く塔を築い  
ている状態なら七十は超える。だが、それはつまり、その分だけ子猫  
の小振りながらも引き締まりそれでいて柔らかさを兼ね備えた素晴  
らしいお尻が背中に押し付けられるという事である。

つまりは天国だ。

「あ、ヤバイ。小猫ちゃんに冷たい目で見られてるのがすっごい分か  
る……おおふつ！ こ、小猫ちゃんつ。それヤバイから！ オレの背  
中で弾むのヤバイからっ」

「……」

「ちよ、無言で弾むリズムを激しくしないでっ。あ、背骨が……マジで  
背骨が逝くから」

「一実くんは二、三回折れた方がいいです。ポツキリ逝っちゃって下  
さい」

淡々と、一実の背中中で軽く弾む小猫。軽くはあっても、その重量が  
洒落になっていない。現に、一実の背中がミシミシと悲鳴を挙げてい  
る。

小猫もノってきたのか、表情が少し愉しそうに見えなくもない。そ  
して、常日頃から一実に座った成果だろうか、背骨が折れないギリギ  
リで弾む技術を見せていた。

「……」

「……カズミエ」

おうっ、おうっ、と情けない声を出す弟の姿に目頭が熱くなる一誠。

何でこんなザマになるまで放っておいたんだ。いつ育て方を間違えてしまったんだろう。

こんな見た目幼女に四つん這いでイジメられて喜ぶ変態に育つ選択って何だよ。何が悪いんだ。

てか変態ポジシヨンは俺じゃないのかよ。

「と、ところで部長！ さっきから難しい顔で何を読んでいるんですか？」

よし、放置しよう。

変態性で弟に遅れをとっている現実から目を逸らし、一誠は先程からリアスが読んでいる書類が何か聞いた。分かり易い強引な話題の転換だった。

「これは——」

「それは駒王町の管理資料ですわ」

「管理資料？」

「はい」

一誠の言葉に答えたのはリアスではなく朱乃だった。コーヒーと分厚い資料の束をテーブルへ無慈悲に追加しながら、一誠に柔和な笑みを向けた。

横目で、資料から目を逸らそうとしたリアスを凄まじい眼差しで睨み付けていたように見えたが、きつと気のせいだろう。

リアスが涙目で資料を見ているのもきつと疲労が原因だ。コーヒーカップを持つ手がプルプルと震えている辺りが重症だ。

「イツセーくん達の一件と今回のフリード・セルゼンの件から、領地の監視と管理に穴がある事が分かりましたわ。それを部長は一昨日から缶詰で調べていますの。唯でさえ悪魔祓いの侵入を許しているのに、それが最強の悪魔殺しだったら領主としての責任は計り知れませんか」

「な、なるほど〜」

何だかよく分からないが取り敢えず相槌を打っておいた。責任やら領地やら、一誠には何が何だ分からない。

唯、リアスの姿を見て大変そうだなと小学生並の感想を抱いた。

そんな一誠に、朱乃は小さな苦笑を浮かべた。

「イツセーくん、チラシ配りの日に言っただけでなかつたかしら？」

「え、ああ、はい」

一誠が言ったこと、それは『眷属でハーレム築きたい』というもの、即ち王になる事だ。

一般人なら鼻で笑うような発言だが、王になれば、リアスと同じ立場になればそれも夢ではなくなる。

悪魔は中世に見られた階級制度で社会を形成している。一定以上の身分、爵位を持つ者には『眷属』を率いる事が許されるのだ。そして、眷属は余りにも理不尽でない限り何をしてでも許される。

つまりハーレムだろうがセクハラだろうが、限度はあるが許容されるのだ。

男なら必ず憧れる至高の夢を、実現出来るのだ。

それを目標に、一誠は日々契約に尽力しているのだ。

「じゃあ、王の在り方と仕事は覚えなさいといけませんわ。眷属を持つには、相応の責任があるのですから」

「そう、ですよ」

悪魔の仕事をしているだけで、王になれる訳はない。

実力と知識、地位があつて初めて眷属を率いる事が出来るのだ。

無能な王に眷属を率いる資格はない。

「そうよく。王様が仕事をサボると、そのしわ寄せが全部、私に回りましたからね……そう、全部」

「き、肝に命じておきます」

「そうして貰えると幸いですわ」

凄まじく私怨を感じる。そして実体験故の哀愁も。

最早横目ですらなくリアスをガン見で睨んでいる。だが当のリアスは知らぬ存ぜぬと新しい資料に視線を落としている。

決して目を合わせようとはしなかった。

「……朱乃。イツセーをイジめるのはその辺りにしておきなさい」

「やだわ部長つたら、私は仕事を配下に丸投げするような王になつてしまわないよう、教育しているだけですわ」

「そうね……。それで、この依頼は」

息を吸うように毒を吐く朱乃の言葉を右に流して、資料をヒラヒラと揺らした。

朱乃が追加で渡した資料の一枚だ。

「大公からののはぐれ悪魔討伐の依頼です」

「何故先に言わなかったのかしら」

「手元の資料に集中されてるご様子でしたので」

「本当に気が利くわね」

「恐れ入りますわ」

じゃれ合いのような嫌味を交わしながら、内容を読み出すと、リアスから心底疲れた溜息が溢れた。

「この忙しい中で、更にはぐれの討伐をしろとはね……」

「お仕事に文句を言っではいけませんわ」

「はあ……被害は」

「まだ出ていませんわ。依頼も、強力なはぐれがこちらに向かった、という物です。領地に侵入する可能性が高いため、私達に依頼が来たのでしょうか」

「そう……なら被害が出ない内にさっさと片付けましょう。面倒が増えるのだけは避けたいわ」

「貴女は気晴らしがしたいだけでしょ」

そう言って手持ちの資料を投げ出すと、さっさと立ち上がって討伐の準備を始めるリアス。その目はやっと書類との睨めっこが一旦休止になった開放感で光を取り戻していた。

そんなリアスを見て溜息を零しつつも、朱乃は机に散乱した資料を片付けて、自分も準備に取り掛かった。

「小猫。弾んでないで行くわよ」

「はい」

「へぶっ！」

手足を拘束していた魔方陣が消え去り、一実が崩れる直前に小猫は跳ねるように立ち上がった。

その瞬間に掛かった重みで一実が床に叩き付けられたの言うま

でもない。

「祐斗、空気になってないで動きなさい」

「あ、覚えててくれたんですね」

「イツセー、貴方もいつまでも座ってないで立ちなさい」

「あ、はい」

慌てて立ち上がる一誠は、ほとんど存在を忘れられていた祐斗の背中を追うように立ち上がった。

「あの、部長。今から何をするんですか？」

「詳しくは向こうで話すわ。まあ、今回は貴方に実戦を経験して貰おうと思っているわ」

そう言うと、朱乃が魔方陣を起動させた。

眷属達が紅の光で発光する魔方陣の中央に集まろうとしている中、不意にリアスが言葉をこぼした。

「……ああ、そうだわ」

突然何かを思い付いた様子のリアスに眷属たちの視線が集中する。

魔方陣の中央に並び、準備は整っている。後はリアスが並べばすぐに転移がされる。

「私は少しカズミと話してから行くわ。先に行っていてくれないかしら？」

「……？ 何を話すんですか、部長」

「少し注意をするだけよ。何もしないから安心なさい」

不思議そうに首を傾げる一誠に理由を簡単に説明してから朱乃に目配せをする。

朱乃は微笑を浮かべて頷くと、魔方陣の転移を開始した。

一瞬魔方陣が強く輝きを放った次の瞬間には、眷属達の姿は消え、紅い光の残光を漂わせた魔方陣だけが残った。

眷属を見送ったリアスは、一度深く息を吸うと、背後に座っている一実の身を向けた。

「さて、カズミ」

「……なんででしょうか先輩」

床に胡座をかきながら、コキコキと手首の具合を確かめている一

実。

オ力研部員が居た時とは打って変わり、カズミの声は低く、冷たかった。

「まだ、私達の事が信用できてないみたいね」

「……」

「勝手な模擬戦も、私達……いえ私に抱く不信感からでしょう。そうでなければ、自分達でコソコソ模擬戦せず、私の管理下で誰の目につき心配もなく全力を出せたわ。そして、フリードに襲われる事も、恐らくなかったわ」

「ご最も過ぎて反論の余地ありませんね」

「貴方の抱く不信感は痛く理解できるわ。私も、自分の眷属を横取りした相手を好きになんてなれないわ」

「……ホント、貴女は好きになれません」

淡々と、一実の思考が暴かれる。

態々夜中に模擬戦を行った理由も、そこまでの思考も全て。

先程まで副部長に泣かされていたのと同じ人物には思えない程、一実に語り掛ける姿は支配者然とした、上に立つものの風格を纏っていた。

「でもね、貴方は私の可愛い下僕を危険に晒したのよ？ 鈍くない貴方なら、私がどんな気持ちか、分かるわよね」

「ええ、激痛が走る程によく分かります。ですから相応の償いはさせて頂きます。今回はオレが原因ですから」

胡座を解いて立ち上がり、リアスを見上げる。

一誠より背が高いリアスを、一誠より低い一実では自然と見上げる形になってしまう。

一実がリアスに抱く不信感は、一誠が悪魔にされた事が大体の理由だ。

悪魔に対しての嫌悪感は勿論抱いているが、これについては兄と同じ種族だと嫌悪感はもう無いに等しい。

だが、リアスについては別だ。

兄を救ったとはいえ悪魔にした張本人であり、一実にとって初めて

目にした悪魔だ。

どうしても、恐怖と不信感が拭えなかった。

それと、

「なら私の下僕になりなさい」

「それは全身全霊で拒否します」

しぶとく勧誘してくる。

初めて会った時以降、偶に勧誘されその度に断っているが、この悪魔一向にめげる気配がない。

そんな所も一実が苦手としている理由の一つだ。

「……まあ、今回は保留にしとくわ」

「それは償いの方ですか？ 勧誘ですか？」

「さて、カズミ。今から私ははぐれ悪魔の討伐に行くわ」

「あ、スルーですか」

「貴方も、ここの部員にカウントされているわ」

「それは流石に初耳なんですわ」

「私としても、貴方とイツセーの戦闘能力は見ておきたいの。でも貴方は人間。行かないというなら、強制はしないわ。危険もあるしね」

本来なら、はぐれ悪魔の討伐に一般人が参加すること自体が不可能なのだ。

だが、今回は実力の把握をするという理由で、特別に参加できる。

もし、この機会を逃せば、一実がはぐれ悪魔討伐に参加する事は恐らく二度とないだろう。

「行くに決まってるじゃないですか」

決まり切った答えを聞くのは人が悪い。

人ではないのだが。

「ふふ、なら向こうの魔方陣に行って頂戴。それは人間でも飛ばせるから」

「フリードの時に言っていた魔方陣と似てますね」

「よく覚えているわね。その通りよ」

「変な所に飛ばすのは止めて下さいね」

「あら、飛ばされたいのかしら？」

憎まれ口を叩きながら、リアスに指示されるままに一実は一誠達が使った魔方陣とは別の位置にある魔方陣の中心に立った。

「ああ、そういういえば伝えたい事があるのよ」

リアスは思い出したように声を出しながら魔方陣を起動させた。

一実を中心に魔方陣が輝き、幾つかの数字が浮かび上がって空中に浮かんでいる。

その非現実的な光景を目に焼き付けながら、一実はリアスへと視線を向けた。

「何ですか？ まさか本当に変な所飞到す気ですか？」

「違うわよ。これは単なる忠告よ」

魔方陣の設定をしながら、リアスは答えた。

魔方陣を形成する無数の数字が浮かんでは消えを繰り返しているのは、映画でプログラミングをしているシーンを思わせた。

「余り無茶はしないことよ。悪魔死になりたくないならね。それと

——二度も兄を失いたくないでしょう？」

蠱惑的な笑みを浮かべるリアスの瞳と目があったと同時に、魔方陣が起動し一実が飛ばされた。

リアスの言葉は、一実の心臓に深く、鉛で出来た杭のように突き刺さっていた。

「……」

一実を見送り、しんと静まり返った部室。先程までの騒々しさが嘘のように感じる程に、一気に静寂の波が押し寄せて来た。

リアスは一度息を深く吐き出すと髪を掻き上げた。

「一実は、こう言えば大丈夫ね」

踵を返しながら、誰に言うのでもなく呟いた。

自分と同じで身内を大事に思う一実に、今の言葉は効果的だろう。自分に対しての好感度は下がるだろうが、少くとも無断で勝手をする事は無くなるはずだ。

それが大切な兄の為だから。

「一実、私も大事な下僕を失いたくはないのよ」

情愛を司る悪魔、グレモリー。その深い愛情は愛しい下僕に注がれ



る。

故に、不安の種は摘まなければならない。

「絶対にね」

それが彼女の在り方。王としての在り方。

一実もまた大事な存在で在るが故に、好まない脅しをする事も躊躇わない。

彼女が魔方陣で愛しい下僕の元に転移すると同時に、部室の床に置かれた蠟燭の小さな火が吹き消されるように宙へと消えた。



「ドナドナドゥナ」

時を遡り二日前の真夜中。暗闇に閉ざされた街道に、音程の狂った明るい歌声が木霊している。

人目を欠片も考慮していない歌声の主は、声と同じく人目を引く白髪に、小刻みに消える街灯の光を反射させている。

「フリーちゃんはね、フリードってゆるんだほーんとはね」

突然、曲調が一変して明るくなった。だが、相変わらず音程はめちゃくちゃで聞くに耐えない。

ズル、ズルと死体を引き摺りながら歩いている男、フリードは、狂った音程で歌い続けながら目的地を目指していた。

時々、ベチャリと死体から流れる血液の粘着質な水音を足音に織り混ぜている。

「だけど滅茶苦茶VeryVeryStrongだから自分の事フリーちゃんてよくぶんだよ。いつも通りだね、フリーちゃん」

英語の歌詞だけ無駄に発音良く歌いながら、ズルズルと歩いている内に目的地に到着した。

そこは廃れた教会だった。

長らく人の手が入っていないのか、窓のガラスは罅が入っており、そうでなくても汚れて曇っている。壁にも罅が走り、長年の劣化を感じさせる。

庭園も、草が好き放題伸びており、膝の高さまで届きそうな程だった。

これ以上ない程に廃屋の体を成していた。

「ふくんふくん」

フリードはそんなホラー映画に出て来そうな教会の扉に鼻歌交じりで近付くと、建付けの悪い扉を蹴破るように開いた。

静寂に包まれた夜闇に、扉が弾ける音は凄まじく響き渡る。

「レイナーレ様。皆大好きフリード君が帰りましたよ」

ズルズルと、赤い道を描きながら教会へと無遠慮に入っていく。

外観に反して、内装はそれほど荒れていなかったが、フリードが歩く事によつて筆で描くように赤い汚れが広がっている。

「貴方、その掃除するのミッテルト達なのよ？」

死体を引き摺るフリードに、声が掛けられた。

フリードは掴んでいた死体をぞんざいに投げ捨てると声の主を見上げた。

「そんぐらいしか役立たないんですからいーじゃないですか。仕事が出来て泣いて喜びますって、レイナーレ様」

「貴方ねえ……」

床から数メートル離れた高さの十字架に腰掛けながら、レイナーレと呼ばれた少女は額を抑えた。

長く艶やかな黒髪を垂らして呆れる少女の姿を見て、フリードは少し満足げにしている。

「まあ、いいわ。それで？ 一日以上も出歩いた事に対する釈明はあるの？」

「んんん。面白そうな二人組を見付けたんで紙のお導きに従ってフォーリンラブしようとしたら保護者の皆様がノットフォーリンラブな方々でして、やむ無くスタコラサツサしたら今度はクソつまんねえ三下に絡まれたした。これ証拠でっせ」

全く容量を得ない釈明を行うと、フリードは足元の死体を二度足で小突いた。

蹴りで揺れるズタ袋のような衣服は、教会の神父服にも見える。フ

リードのいう三下とは、恐らく教会の関係者なのだろう。

だが、レイナーレの興味は別にあつた。

「面白い二人組？」

フリードが面白いと評する存在。しかも、フリードと遭遇して生きているのだ。それだけでも興味の対象になりえる。

そして、彼女自身も覚えがあつた。

「あく、確か……………あつと、兄っぼいのは全く覚えてないっすけど、弟の坊っちゃんは」

自然と、レイナーレの口角が吊り上がり三日月を描いていく。

奇妙な程に確信があつた。

「カズミンって言ってましたね」

「……………へえ」

その妖艶な美貌に満面の笑みを浮かべて、レイナーレ……………天野夕麻は黒い翼を広げて十字架から降りた。

lif a. 10 夜の騒乱

——お兄様、私、自由でありたいの

遊びに付き合っている最中、可愛い妹から、そんな言葉が飛び出した。

——どうしたら、そう成れるのかしら？

小首を傾げて、無邪気な笑顔で尋ねる妹は、冥界広しといえど、この上ないと確信できるほどに愛らしい。

だからだろうか。

家柄や、地位や血筋に縛られたくない、自由に、自分の意思で生きたい。

そんな、純血の悪魔にとつてこの上なく困難な望みを語る妹に、こんな言葉を掛けてしまった。

——強くなれば良いんだよ、リアス。

——強くなる？

人間ではまかり通らぬ、短絡的な理屈。だが、悪魔で在るが故に、その野蛮な理屈は通ってしまう。

——そう。理不尽な屁理屈を立てて邪魔する相手を、いつまでも昔を引き摺ってグダグダ文句を言う相手を、自分の意思を掌握しようとする相手を……純粹無垢な力で叩き潰すんだ。

もう隠す事すら出来ないガキ大将の理屈。相手の意見を武力で持って制圧する、外道——というかアホの極み。

今に思えば、この時の自分はストレスが溜まっていたのだろう。

魔王となって、日々古狸共の相手をした鬱憤を、妹に語ってしまった。

実際は出来ないけど、こう出来たらどんなに楽だろうか……。

そんな、尊敬する兄の言葉を聞いて、純粹だったリアスは目を輝かせた。

——お兄様！ 私、強くなりたい！

輝く笑顔。

可愛いを完全に通り越している。

そんな妹の笑顔を見るだけで、天使の光のように、日々の鬱憤が体ごと吹き飛んでしまいそうだ。この時、どんなだらしのない顔をしているのか、考えたくもなかった。

可愛さは既に魔王級の妹から、そんな事を言われてしまったら、答えは一つしか導き出されない。

——分かった、お兄ちゃんがリアスを鍛えてあげよう。

シスコンは罪深い。

サーゼクス・ルシファーは後になってその事を理解する事となった。



「うおおおおおおおおおツツ!! 死ぬうう！ 一実、一実っ！ 早く撃たねえとヤバイぞ！」

「ハハハハ一拍待てよ兄貴……。実弾効かねえのは予想外すぎだろ、マジで」

駒王町郊外の寂れた廃工場に、叫びとけたたましい銃声が木霊する。

草木も眠る時間に、全力で走り回るのは一誠と一実だった。

一実は両手足に白銀の強化装甲を纏って肩に巨大な銃器を担ぎ、一誠も左腕に赤龍帝の籠手を装備して走っている。

そして、その後ろには巨大な異形の影が迫っている。

『ケタケタケタ。どおしたの、もっと愉しく踊りなさい』

「兄貴、大好きなおっぱいだぞ」

「正直アレは勘弁」

廃工場の風化した設備を破砕しながら、人から掛け離れた存在が槍のような武器が振るう。

はぐれ悪魔。

主となった悪魔の手元から離れた、野良犬の様な存在。

人間のみならず、天使や堕天使にも傍迷惑な存在だ。

悪魔らしい欲望のままに暴れ狂い、甚大な被害を巻き起こす事も有り得る。

特に、主を殺して自由になったはぐれ悪魔はS級とされて、危険視される存在だ。その力は、上級悪魔に匹敵するとされる。

そんなのが野放しにされるのは迷惑極まりない為、悪魔も積極的に討伐している。

そして、一実達を襲う、女性の上半身と獣の下半身を持つ大柄な悪魔は、S級に分類されている。

軽く振るわれただけで、まるで紙切れのようにコンクリートが削られ、衝撃は一実達の行く手を阻む。

『ケタケタケタ。ほうらどうしするの？ 当たってしまおうよ？』

「喧しいわクソ悪魔」

いたぶるように槍を振るう悪魔に、一実は罵倒を吐き捨てると同時に、肩に担いでいた巨大銃器を向ける。

ガゴンツ

と、そんな重々しい音を響かせるように構えられたのは、長大なガトリング砲。

M134、ミニガン、無痛砲と呼ばれるシュワちゃん御用達の単銃身機関銃だ。

銃身の重量やバッテリーの重さで、本来な持ち上げる事すら困難な

銃だが、白銀の装甲で強化された筋力であれば軽々と持ち上げることが出来る。

「死ねよおらああああつー！」

六本の銃身が高速回転して、毎分二千〜四千発の、途轍もない量の弾丸が、工場に積もった砂埃を巻き上げながら吐き出された。

装甲車でも無ければ、即座に蜂の巣となるような弾丸の滝。さしもの悪魔も、これ程の威力は耐えられまい。

そう、さつきまでは思っていた。

『ケタケタツ！ 学ばないねえ、そんなオモチャは効かないよ』

一実が狙う上半身の女性体。大量の弾丸を浴びているにも関わらず、その白い肌には傷一つ無い。

彼女の身体に当たる寸前に、小さな魔法陣を展開して、一発も余すことなく防ぎ切っているのだ。

膨大な量の弾丸は、悪魔の進行速度を僅かにを阻害するだけの効果しか発揮していない。

「チツ！」

先手必勝と、悪魔を見付けると同時にブチかましたものの、見事に無傷。そして、地力も二人を圧倒的に上回っている。

逃げてみたものの、現状は芳しくない。

どうやら、悪魔は無差別に廃工場を破壊していた訳ではなさそうだ。

ガトリングを放ちながら、周りに目を向けると、悪魔が振るう槍によつて抉り取られた無数の壁と通路が見える。一見するだけでは、ただ破壊されたようにしか見えない、凄惨な光景だ。

だが、自分達がこれから走って逃げようとすればと考えると、また違って見える。

満足に走れないように抉られた床。それに拍車をかける、壁や天井が崩された残骸。

二階や外に繋がる階段や出口は完全に崩され瓦礫と化している。

「マジかよ……」

完全に退路を絶たれている状況に、思わず苦笑いが溢れた。

はぐれ悪魔と聞いて、野生動物のようなモンスターを想像していたが、予想以上に頭が回るように思える。

「兄貴！ 倍加はどうだ?!」

「七回目だ！ あと少し欲しい！」

「おっけ」

ガトリングの銃声に遮られないように声を張り上げる。

この芳しくない戦況を確実に覆せるのは、一誠の赤龍帝の籠手以外にない。

既に七回の倍加が蓄積されているが、より確実さを求めるのなら少し足りない。

そして、ガトリングでその時間を稼ぐのには、悪魔との距離が近すぎる。

『おや？ オモチャで遊ぶのはおしまいかなあ』

「……」

ガトリングを銃身の回転が止まるのも待たずに投げ捨てる。

ぞんざいに捨てられたガトリングは、地面に投げ出される前に空中で光の粒子となって消えた。

傍から見れば諦めて武器を投げ捨てたように見える一実には、悪魔はニヤニヤとどこぞのエクソシストを彷彿とさせる笑みを浮かべた。

「……外したくねえから、動くんじゃねえぞ……」

——具現基礎『ガントレット』

悪魔の言葉に中指を突き立てて呟く。

その声に呼応して、白銀の装甲に変化が現れた。

左腕全体を覆っていた装甲が、ガトリングのように光の粒子へと変化する。だが、その粒子は消えることなく、右腕の装甲へ吸い込まれる様に収束しだした。

粒子が集まるにつれ、白銀の装甲が赤と橙、そして黄色に染まっていく。そして形状もまた、より打撃へと特化した物へと変わろうとしている。

『……おやおや、ちょっと危なそうだね』

変化していく装甲を見て、悪魔の目の色が変わった。一実の右腕か



ら感じるプレッシャーが、笑っていられない物だと気付いた。

それと、その後ろで倍加を重ねる一誠の力も、もう無視出来ない程になってきている。

殺すには一誠の前に立つ一実が邪魔でしかない。

『それじゃあ……死ねえっ!』

迅速に一実を殺すべく地面を蹴り出し加速する。厚いコンクリートで作られた床が衝撃で捲り上がるほどの脚力で、悪魔と一実の距離は一瞬もせずに踏み潰され、槍が振り上げられた。

それは悪魔にとって必殺ともいえる間合い。

脆弱な人間など、視認すら許さず確実に叩き潰す事が出来る。

『なっ?!』

だからこそその信じられなかった。

その人間が、自分を見て嗤っている事に。

「アホめ」

嘲るような呟きが聞こえた瞬間、悪魔の獣の足が横一閃に切り飛ばされた。

『なっ!!』

驚愕と混乱。並の刀剣どころか、業物でさえも通さぬ強靱さを備えた毛皮が、たった一振りで切り飛ばされる異常事態。

だが、そんな思考は一実が握る、悪魔の足を切ったと思しき鉞を見た瞬間霧散し、即座に残った三本足で背後に跳んだ。

それ程までに、その鉞は悍ましかった。

『な、何故、そんな物を人間が持っている?!』

黒一色。破壊され尽くし建物の役割を果たせていない廃工場に差し込む、微かな月や街灯の光を受けてなお、その暗黒の刃は光を反射する事ない。

ただ大きな存在感を放っているその鉞は、確かに悪魔の身体すら切り飛ばせるだろう凶暴性を宿している。

だが、悪魔が驚くのはそこではない。

鉞から感じられる、確かな邪気。

溢れ出るそれは、悪魔にとってあまりに身近なもの。

怨念、憎悪、嫌悪。あらゆる負の感情が溢れるように、その刀身から流れ出ている。

——何だ、アレは

悪魔ですら慄くほどの怨念、呪い。並大抵の人間であれば、即座に発狂しかねない程の代物だ。

だが、一実は笑ってその鉈を握っている。手には黒いグローブを嵌めているが、それだけであの黒い鉈を握れている。

目を見開いた悪魔の顔を見て、一実は笑みを深めた。

「距離とって良かったのか？ ほら——」

『っ！』

右手を構える一実。

鉈に気を取られている間に、右腕の変化はほぼ完了していた。

肘までだった装甲が肩まで覆う、燃えるような色をした手甲。一実の背から生える三枚の赤い羽根。

「——『シエルブリット』具現完了」

その言葉を呟くと、一実の髪がヤマアラシのように逆立ち、手甲が展開しより鋭い打撃を放つ形となる。

「衝撃の——」

その言葉が悪魔に届くより速く、赤い羽根の一枚が炸裂し一実は加速した。

一瞬もせず悪魔が離れた距離を潰し、悪魔の目の前に現れる。

悪魔の優れた動体視力は、加速する一実の姿を確かに捉えていた。

反撃は間に合わない。それでも弾丸を防いだ魔法陣を形成することはできた。

だがそれが単なる悪足掻きだと、即座に理解させられる。

空中で、一実の拳が握り締められる。

人差し指から、中指、薬指、小指、そして親指が硬く握り込まれた。相手を真っ直ぐ打ち抜く、鉄拳。

「ファーストブリットおおオオオオオ!!」

『ぐぼおっ！』

加速の勢いに乗った拳は、悪魔の防御をいとも容易く、真正面から

打ち砕いた。

女性体の顔面にめり込んだ拳は、悪魔の巨体を殴り飛ばした。

正しく弾丸、否、砲撃のような一撃。

夜闇に轟く轟音。何枚もの壁を突き破り、悪魔が工場の端までぶっ飛んで行った。

「わああ……」

殴り飛ばした副産物として作られた、壁の大穴を見てえげつない威力に思わず声が出た。

そして次の瞬間、一実の胸中に興奮が溢れ出した。

「兄貴、兄貴！ 凄えヤバイ！ 主にテンションがヤバイ！」

「イヤイヤイヤ、ちよつと待て、なんでお前がシエルブリット使ってるだよ!? てかさつちは呪鉈はじゃねえか！」

「敬意を持ってナタ先輩と呼びなさい」

「ナタ先輩！」

「よろしい」

「一実先生、何で持ってるんですか！」

「俺だから」

「流石っす！ あとシエルブリットが俺と丸被りっす！」

「それは知らね」

傍から見たら頭の悪そうな会話にしか見えないが、実際は情報交換として成り立っていたりする。嘘ではない。

シエルブリットと呼ばれる、鮮やかな手甲。

呪鉈『辻斬』と呼ばれる、黒一色の鉈。

どちらも、一実と一誠が愛好している作品に登場する武器だ。

武装具現は想像した武器を、代償さえ払えば『何でも』具現化させる神器である。創作物から武器を引用して使うという発想は、当然使い始めた頃からあった。

しかしそこで発生するのが燃費の問題だ。

構造、理論、構成する物質、そして一実の想像力によって消費する代償は決定される。

その性質上、創作物の強力とされる武器で燃費を抑えるのは困難を

極めた。

要約すると燃費が凄く悪いから、強力過ぎる武器を具現化出来ないのだ。

獣殿の槍や刹那の断頭台など、具現化しようとした瞬間に干乾びてしまう。

「それで、終わったか？」

大穴を覗いて首を傾げる一誠。

後ろでブーストを溜めながら見ていたが、吹き飛んでいった速度と衝撃、あれはどう見ても必殺の威力を内包していた。

少なくとも、一誠はあれで殴られたら死ぬ自信がある。

「どーだろうな——いや、まだっぽいぞ」

呪銃を構えて、一実が言う。視線は壁の向こう側を睨み付けている。

『アアアアアア人間風情があああああああつ!!』

轟く爆音のような怨嗟の叫びを挙げて、悪魔が壁を砕きながら恐ろしい速度で一実達へ呐喊する。

美しかった女性体の美貌はシエルブリットの一撃によって抉り取られ、見る影もなくなっている。

「まだ走れんのかよ、タフだな……今度は確実に息の根止めて——」

「——俺がやるよ」

羽根を炸裂させようとする一実の前に一步踏み出すと、赤龍帝の籠手を嵌めた左腕を大きく振り被った。

『Concent Boost!』

「うおっ」

一誠から吹き出す赤いオーラ。風を伴う程の勢いに思わず声が出てしまった。

そして、もう目の前に悪魔が迫っていた。

次の瞬間、悪魔と一誠が同時に攻撃を放った。

『アアアアアアアツ!!』

『Explosion!』

「らあつ!!」

次の瞬間、全てが消し飛んだ。



「どうですか？ 部長」

雲一つ無い快晴の夜空の下。廃工場を見下ろすように展開された魔方阵の上で、木場がリアスに尋ねる。

「予想以上ね。素晴らしいわ」

「……二人とも強いです」

嬉しそうに頷くりアスとは反対に、小猫は驚きと多少の不安を含んだ様子で呟く。

それも当然といえば当然だ。ついこの前まで普通に接していた、人間の青年がこれ程の力を持っていたと知って、驚くという方が酷だ。

ついでにいえば、あんな変態が強い能力を持ったら何をするか分からない。

少なくとも匂いを嗅がれる程度では済まないのは確実だ。

「神滅具持ちのイツセーくんは勿論ですが、私はカズミくんがあそこまでとは思いませんでしたわ」

「はい、予想以上に強いです。あの手甲もですが、あの鉈……魔剣とも違う悍ましい気配がします」

「後で本人に聞いてみてはどうでしょう？」

「そうですね、聞いてみます」

木場と朱乃の一実に対する素直な感想だった。

一誠と違い、宿すのは稀少とはいっても所詮は一般の神器であり、その身は生身の人間。

S級のはぐれ悪魔と戦うのは些か荷が重いのではないかと思っていたのだ。

だが、実際は悪魔の不意を突いて大きなダメージを与えてみせた。

小猫のに対してセクハラをしている青年という一実の評価は今の一戦でガラリと変わった。

「……念の為に結界を張つといて良かったわね」

眼下では肩を叩き合って喜ぶ二人。

二人の後ろ、悪魔が居ただろう場所は、完全に消滅していた。

半壊状態だった工場も、そこから地面ごと無くなり、真つ直ぐ彼方にある結界までめぐり取られるように殴り消されている。

もしも何も対策せずにいたら、射線上に在る街を消滅させるか、良くて甚大な被害を及ぼしていただろう。

「少し危なかったですわ。イツセーくんの、余波でも凄いですもの」

「イツセーの身体能力と神滅具の相性かしらね。このまま強くなれば、私の夢も大きく近づくわね——でも」

上機嫌に笑顔を浮かべるリアスが、不意に目を細めた。

その視線は二人の背後、地面深くまで抉り取られた場所を見ていた。

まるで深い谷のように底が闇に飲まれ、深淵のように底を見せない。

「あの程度で殺せたら、S級認定されないんだけどね」

地響きのような、呻き声のような不快な音が響き、地面が激しく揺れている。

異変に気が付いた一誠と一実が、揺れていながらも体制を整えている。

「あれは厳しいでしょうね」

闇の底から、腕が現れた。

巨大で、甲殻のような装甲で覆われた異形の腕。

闇の中から伸ばされた腕は数十メートルをゆうに超えている。

「じゃあ、行きま……あら」

後ろに控える下僕達に声を掛けようとして、一人欠けていることに気が付いた。

「小猫ってば、先走っちゃって……まあいいわ」

工場の壁を紙か何かのように碎き破いて走る小猫の姿に困ったよ

うな笑い混じりの溜め息を吐き出す。

フリードの時も許可は出したものの、同じような勢いで飛び込んで行ったのを思い出す。

何だかんだされているものの、一実の事を大切に思っているのだから。

一実の作るお菓子かもしれないが。

「私達も行きましょう。二人に、私達の力を魅せて上げましょう」